條無御座候所者申上置候間畧文仕候且御神圖之所者夫々印置候間
御覽可被爲下候何か御心配之段奉察上候しかし萬事天命と御定被
遊候御事重々奉感心候此度者御尊荅迄追便に委敷可申上候恐惶謹
言

九月十七日認

一森彦六郎樣　　黒住左京

尙々時候折角御自愛專一に可被爲遊候御端書之所も承知仕候夫々
相達可申候以上

七五

先月十五日御調尊書難有奉拜見候時分拂寒冷彌增に御座候所御機
嫌よく被成御勤候由奉珍重候隨而爰元御母君樣先達而は餘程御不
快に被成御座候得共此節は段々宜敷被成御座大方御平生に被成御
座少も御心配は被遊間敷候少々つゝ之事は憂世の有樣に御座候
尊君樣にも先達而之御不快も最早御さつぱりと被遊御座候哉と奉
存候幾度申上候も元は一つに御座候得共誠に世の中の事邪は正の
元と奉存候夫故世の中を邪を見て彌正をます事道の大一と奉存候
彼仙石家も天の御手本と奉存候段々委敷被仰拜見仕候今の世にも
珍敷事と奉存候今日は尊家にて誠に一筆大亂筆荒々尊荅迄如斯御
座候恐惶謹言

十一月二日

彦六郎樣　　左京

四八

尙々次第寒氣に相成候間萬事御用捨被遊御勤可被爲成候以上

一筆啓上仕候時分拂寒冷彌增に御座候所彌御機嫌能御勤被成候由

奉珍壽候隨而當地御母君樣も先達而は御不快に被成御座候へ共最早大方御平生にて先日は七島屋へ御出被成候位に御快よく被成候御次に小子方皆々無別條相暮居申候乍惶此段御休意可被下候兼々御尋被遣候道も時には奇妙成事も出來難有事に奉存候夫ゆへか所々より被賴此節少困り申候位に御座候彼是と申内年内も今少に相成候間來春にも相成候得は又御歸り近寄候間委敷は御直に御咄申上候先は時候御見廻尊答迄如斯御座候恐惶謹言

十一月十六日

一森彦六郎樣

黒住左京

尙々次第に甚寒に相成候間諸事御用捨專一と奉存候以上

天保十一年

六四 一筆啓上仕候時分柄餘程長閑に相成候而好節に罷成候處先以御機嫌能御勤被遊候哉と奉恐賀候隨而尊家二方樣共彌御機嫌能御六間敷御暮被遊御次に小子義も難有日々をくり居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候道も誠に開最早百か一つも勤り不申候得共此上者彌天命次第に仕候何かと申内早御歸國も日々に近寄積る御咄申上度と奉樂待候いつも世話敷誠に御請迄如此御坐候恐惶謹言

二月二日出

黒住左京

一森彦六郎樣

尙々門人内へ御加筆申達し候所猶又宜敷申上候樣申出候以上

二二 一筆啓上仕候時分柄餘程暖和に罷成居申候處益御機嫌能被遊御勤

恐悦至極に奉存候隨而當地尊館御二方樣共益御六間敷御機嫌能被
成御坐奉恐賀候御次に小子義も彌世話敷御かけにて益榮に日々を
をくり居申候乍憚御尊意安く思召可被爲下候難有事は道も色々と
相成大難と存居申候事も天命に相任せ候得は跡者難有事に相成候
事段々御坐候爰を相考へ申候得は難ありが難有にて御坐候誠に一
から万まて皆天命と奉存候左樣に御坐候得は心正直に御坐候得は
何事も皆天命に御座候間少も苦に成と申事少も無御坐候何もかも
難有斗に御坐候申上度事は澤山御坐候得共難盡申御座候最早御歸
鄕も今少に相成候間積る御咄申上度と樂奉待上候いつも急荒々如
此御坐候恐惶謹言

二月十六日

黒住左京

先日者參上仕久々に而拜顏仕大慶至極に奉存候已來彌御壯健被
御座珍重不少御事奉存候然者門人之中鄕司茂左衛門と申人二百石
に而御座候處同人義者兼々能人に而小子心に叶人也同人親七右衛
門と申人者久々病氣其上おこりてに而子としては親之事也數年心
配致し候所小子道に而助り居申候に去年より祖母次に母先月父七
右衛門三人とも死去被致候誠に大心配何方困窮に而も二百石者
〳〵之備御座候故元より困窮成迚も此度者取つゝきかたくとせま
られ候間誠に同人道に少もそむく人に無御座故餘りいたは數事に
而助置候所誠に活出被申候然る所此節三貫目者無御座候而は家難
立尤此後者如何樣にも儉約者致され候間追々者是迄とは違宜數御

（花押）

座候得共一旦之所甚難立行右に付三貫目の所壹貫五百目請合候而
小子手前に而壹貫目は相調申候今五百目之所御役介に奉存候得と
も則小子へ御借用可被下候是程之事者爰元に而隨分可申人も段々
御座候得とも先年大金を段々取次候所皆々未不返候故門人中に封
せられ只今に而は一向左樣事者禁に仕候得とも目前に少之事に而
二百石を棒にふらすも道ならすと奉存候心ならすも御役介申上候
しかし外樣へは御沙汰者御無用被遣可被下候實者ケ樣申上るも貴
所樣にも却而御いんとくにも可相成と兩ためと奉存候間極內に申
上候有無御答御聞せ可被下候猶書外拜顏萬々可申述候謹言

三月十五日

那須喜藏樣

黑住左京

倘々乍末筆皆樣へ宜敷御傳聲奉頼上候且是者內祝仕候間御目にか
け候間御笑納可被下候以上

七四

每度御細書被爲下難有奉拜見候彌御機嫌能御勤被遊候由珍重不少
御事奉存候次に爰元御二方樣御機嫌よく被成御坐珍重奉存候且又
最早御歸國も誠に今少罷成追付得尊顏積る御咄し申上度と奉待上
候先便にも御申越被成候一件此方にても　今村宮へも當家にても
每日神拜仕候間御氣遣者無御坐と奉察候得共しかし御氣は御付被
成候樣可被遊候今日も會日殊に段々大勢にて御座候故大亂筆荒々
如此御座候謹言

三月十七日

左京

彦六郎樣

一四一　彌御機嫌能御着府被成候哉と奉恐賀候隨而小子義も不相替日々世話敷難有相暮居申候乍惶尊慮易思召可被下候御立前御約束申上候通り毎朝日拝に御目にかゝり候積に御坐候御忘被下間敷候

一道は〇きよより外は無御座候時に一首出ほうたひ申上候

まるき中に丸き心をもつ人は

かきりしられぬ〇き中なり

是則いきとふしなり何事も限りをつけ給ふへからすまるき御神に年はより不申少の間もかの丸き難有事御忘れ被成間敷候面白も嬉敷も苦に成もかなしきも心一つのきわめ也天照御神への御信心は少しも〳〵いんきゝらい也たゝ少の間も御ゆ段被成間敷候是迄か無念の文也かうしやくと思召御覧可被爲下候むた事は少も不申上候あなかしこ

三月十六日出　黒住

尚々先文に申上候小子御文通申上候は道はと申上候よりはかうしやくの心也無念にて相認候間いつも何を申上候も相知れ不申候是を活物と思召御覧可被爲下候書外追々一筆つゝ申上候申上候迄も無御座候得共御他見は被成（虫喰）

一〇四　田口　様　貴下　黒住

御道中無御滞嘸々御着府被遊候哉と奉存上候御次に小子も彌榮に日々難有西東へはせ廻り相樂居申候此段乍恐尊慮安く思召可被爲

下候兼々申上候通り毎朝御目にかゝり候積に日拜仕候間御由斷も
被成間敷と奉存候
一道者誠に難有ものにて常に〇き中に住其日々を有かく嬉敷何事
も面白く思ひ暮し候得は其おもしろきが直に天照る御神の御心也
少も〳〵七ヶ條の御心御忘被成間敷候時に一首
あら嬉しかゝる樂しき世の中を
誰か浮世を苦のとうという
心一つ開れは何か一つくるしみはなし何につけても樂有かたきこ
と斗なり皆こゝろ一つをひらくとふさくとの二つ也是迄か無念の
文也少のかうしやくと思召御聞可被成候むたことは少も不申上候
早々頓首

黒住左京

三月十六日出

田口愛三樣　玉下

御上樣御凶事に付奉恐入候夫故御無沙汰斗申上候嘸々御事多に御
出務被遊候哉に奉存候爰元御皆々樣御機嫌能被成御座次に小子皆
々も御同意に相暮居申候此段御休意可被遊候
一此節誠に恐入候時節にて一統之陰氣無云斗次第にて重重奉恐入
候しかし何事も道を離れさへ不仕候はゝ悪敷跡者又善事御座候其
道者則いつ迄も生とうし也不申上とも道直に天照太神也是則天地
とゝもに生とうし也其心と我心則一躰なれは一心亂れさへ不仕候
へは限りは無御坐候時に一首

天照す神の御心我こゝろ
ふたつなければ死する物なし
有かたし〳〵

誠に〳〵出ほうたひ申上候先は荒々如斯御座候恐々謹言

四月十六日　　黒住左京（花押）

田口愛三様

九六　又々申上候先達而者少々御不快に被成御坐候處早速御順快被遊候由恐悦に奉存上候於小子も難有早々御禮申上候

尊書拜見仕候彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐壽候隨而御國皆々樣御機嫌よく被成御坐候御次に小子皆々も無異に相暮し居申候乍恐尊意易く思召可被爲下誠に御文面奉感心候

一道は誠勤安き物也其安き事か勤らぬものと見へたり其つとめというは道に住こと也其道と申は兼々申上る通り天照太神也則丸き御神也先便にも申上候通り○きに奉任候者也其まかすること安き事也唐も大和も是迄其所か氣の付ぬ事の不思義成る御事也道といふこと名に迷ひ誠の道をはなれたる人天下一とう也其道を離ぬか我とく所の道也御緣有御人は晝夜ともみちに住給ふへし少にても道をはなれ給ふ時は直にあやうき事也御由斷有へからす時に一首

天つちにたゝ一筋の其道を
すくに行こそ樂しかりけれ

誠に〳〵一筋のみちか常のみち也其常ほと世に難有事は無御坐候毎度申上候通能々此段申上るまても無御坐候得とも御由斷不被遊

御勤可被遊候一つ道はと書初より無念に御座候間能々御聞可被遊
候恐惶謹言

五月二日出

尾關丈五郎様

九四 暑に相趣候處彌御機嫌よく御勤被遊候哉と奉遠察候隨而當地　尊
家皆様御機けんよく被爲入御次に小子皆々御同意に相暮し居申候
乍恐御尊意安く思召可被爲下候當年者格別御繁榮御勤被遊候哉と
奉遠察候しかし其處か兼々申上候通りにて皆天のなし給ふ處に御
座候得は何事も勤らぬと申事は無御座候誠に日月四海を照し給ふ
に少も御苦しみなく道者其日月より出たる道に御座候得はつとま
らぬと申事無御座候其爲の道に御座候呉々もたゝ有かたきと申事
御忘被遊申間敷候於小子者毎朝一度も忘者仕不申候御約束通に仕
候時に一首

誠ほと代に有かたきものはなし
まこと一つて四海兄弟

御笑ひ草いつも〳〵認候時無念より何成とも氣にうかみ候事を其
まゝ相認候間申上るまても無御坐候得共御他見者御斷申上候恐惶
謹言

五月十六日

黒住左京

尾關丈五郎様

尚々日々暑彌增御座候間萬事御用捨可被遊候以上

九五 四月二日出之尊札相達し難有奉拜見候益御機嫌能御勤被遊候由目

出度珍重不過之御事奉存候隨而當地尊家皆樣御機嫌能被成御座御
次に小子方皆々御同意に相暮し居申候乍恐御安意可被爲下候扨御
文面之趣扨々奉感候御事に奉存候夫故何事も萬事御仕合宜敷於小
子も大に大慶至極に奉存候只今迄之思召寄を御ゆるみ不被遊彌御
道を御勤可被遊候

一道は滿(みつる)也　天照太神の御分身のみちてかけぬやう可被遊候人は
陽氣ゆるむといん氣つよるなりいんきかつ時は穢なりけがれは氣
かれにて大陽の氣をからす也其所から種々色々の事出來するなり
何事も有かたひ〳〵にて日をくり被成候へは不殘有かたひに相
成可申也申上る迄も無御座候得共是迄有かたひ事斗の御身の上御
座候へは少も御由斷被成間敷候時御一笑

何事も有かたひにて世にすめは
むかふものこと有かたひなり

善惡ともに有かたひとおもへは時々事々に有かたひ也元來此世に
生れ來るを能々考へ候得は皆かたちは難有が形の持まへ也しかし
我執行は難をなんとおもはぬが我しゆぎやう也さすれは苦に成事
なしくに成ぬ時はあとは樂しみ斗也左樣成心は道より外になし夫
故道に心住ときは大安樂也云すして心一つにて樂はかつて次第也
先は例之文面是迄に御座候不申上とも御他見御斷申上候恐惶謹言

六月二一日出

黒住左京
（花押）

尾關丈五郎樣

三四五

一筆啓上仕候未秋暑甚敷御座候處彌御機嫌能被爲成御勤候哉と奉

恐賀候隨而當地御屋敷皆様御機嫌能被成御坐奉恐壽候御次に小子義も晝夜世話敷御座候得共近頃者御影に而東西をはせ廻居申候乍恐御尊意易思召可被爲下候

一毎度御殊多之御中御細書難有奉感拜候益御勇敷御出務被遊候由於小子も難有奉祈候誠に近頃者道も彌はつし難有は奉存候得共諸々斷に困り居申候

是より少々申上候誠に道は六ケ敷事者少も無御坐兼々申上候通直に天照太神也さすれはいきとうし也晝夜之分知なくいきさへすれはみな太神の道也たゝ少の間もゆるみなくけがれぬやう致し候得は何事も難有事斗（一字不明）時に一首御笑

有かたきことのみおもへ人はたゝ

けふのとふとき今の心の

かね〳〵申上候通我本心は天照太神の分しんなれは心の神を大事に仕候得は是そまことの心也おもへは〳〵心一つに而自由自在とおもへは此上もたのもしき御事也先は荒荒筆を留候早々如是に御座候恐惶謹言

八月二日出

黒住左京
（花押）

尾關丈五郎樣

三四六

尚々今少の暑御座候間何事も御用捨被遊御勤可被遊候以上

自然に奉任候得は大安心に相成申候先小子とも今の考へ其所に而先年の心に而はたゝ一日もつとまり不申候得共難有事は近頃餘りつかれも無御座明暮樂みどうしに御座候時に一首

何事もたゝ樂むにしくはなし

ねてもおきても天の心を

天の心は直に我一心也天にしたがい其天命を樂む時は向ふ所みな
てん命とおもへは乍恐天照太神と心を一ッに致し樂む時は何まて
も樂とふし也先は荒〳〵出ほうたい是迄と筆を留候恐惶謹言

心から

神有月二日出

尾關丈五郎樣

黒住左京
（花押）

山田彌太郎樣

九八　一筆啓上仕候秋冷相催し候處彌御機嫌能御勤被遊候由珍重不斜御
事に奉存候隨而當地尊家皆樣御機嫌よく御勤被遊奉恐壽候毎度御
細書被爲下難有奉拜見候御勇敷御樣子大慶至極に奉存候何かと申
内早半に相成候日々近寄來春にも相成候得は直に御歸國に相成候
しかし何事もおぼら敷不思召天命之難有事を日々取外被成ぬやう
可被成候小子義も彌道盛んに相成近頃者誠に世話敷所々より參り
其上日々せかまれ候には大に困り氣毒なから斷斗に御坐候今の通
にては後々は如何に相成候事やら相分り不申會席も彌相增（破損）
此上も無御座難有次第に奉存候此度（破損）甚世話敷先者荒々亂筆
御尊免可被爲下候恐惶謹言

八月廿日認

山田彌太郎樣

黒住左京
（花押）

尚々追日冷氣彌增に御坐候間諸事御（破損）と奉存候以上

九七　一筆啓上仕候未餘寒難去候處益御機嫌能御勤被遊候由恐悦至極に
奉存候隨而御屋敷皆樣御機嫌能被成御座御次に小子御同意に相暮
居申候乍恐此段御安意可被爲下候偖近頃者大に御無音斗申上候此
節者誠に晝夜と申くらいに御座候しかし難有事者つかれも出不申
難有事に奉存候誠に御歸國も今少に相成定而御競ひ被遊候哉と奉
察候
一河上氏御老母道の歌三首よまれ候甚感心仕候御聞入申上候

たくひなきこと葉の玉の小串もて
とくは心のもつれ成りける

大海の有とは知らてにこり江に
とくはこゝろのもつれ成りける（此歌の下句河上市藏所藏詠草には「たゝよふ魚そ憐れなりける」とあり）

見る度に嬉敷ことのまさりけり
かみの心に移るすかたを

此三首にて何もかもたり候やう奉存候委敷者御歸郷之上萬々御咄
申上候いつも急亂筆御推覽可被爲下候恐惶謹言

二月十六日出　　黒住左京（花押）

山田彌太郎樣

六一　一筆啓上仕候先以先達而は御道中無御滯御着府被爲成候哉と奉恐
賀候已來益御機嫌よく御出務被爲成候哉と奉存候目出度御事奉存
候誠に御立前には參上段々御馳走忝仕合に奉存候何かと御心配被
成候義も御折合宜敷相見へ御安意可被爲下候隨而御留主皆樣小子

義も御同意に相幕居申候此段御安意可被爲下候且先達而御直に申
上候通り何事も憂世の有様と申物は種々のつまらぬ事まゝ有もの
にて御座候しかし我身を我身とおもふ時は何時迄もつまらぬもの
也そこか御執行にて御座候我身を天地君親のものとおもひ給は少
も〳〵御心にさわり給ふ事無御座候只何事も有かたひ〳〵と御き
わめ被遊候得は皆有かたひ事斗に相成候今尊君様の御身之上皆人
の御羨敷おもふ人斗に御座候そこを考へ被遊候而本を御忘被遊間
敷候例之堪忍か誠に御大事と奉存候

住吉大明神様の御神詠にも

身を身ともおもはぬ程に成ぬれは
いつくに住とすみよかるらん

とおもへは思ふほと有かたき御神詠にて御座候何事も御心に御叶
ひ被成ぬこと御座候はゝ是則天よりの我に執行を仰付らるゝのと
思召可被成候先は右御着の御歓迄荒荒如是に御座候恐惶謹言

六月二日　　黒住左京

一森彦六郎様

尚々次第に暑に相成候間諸事御自愛専一と可被遊候早々以上

一筆啓上仕候先以向暑之時分に御座候處御機嫌能御出勤被遊候哉
と奉大慶候文義前後仕候得共先達而者嘸々御道中無御滞御着被遊
候哉と大悦に奉存候隨而御留主様にも御機けんよく誠に近頃者御
二方様御六つ間敷殊に御息災に被成御座無此上も恐悦に奉存候富
田様も追々宜敷爰所なく御安心可被遊候御次に小子義も彌世話敷

何方も一度に開迄も行屆事無御坐候得共先かゝり合に日々をくり
居申候しかし難有事者誠に日々廣り今の樣子にて者後々者如何相
成候事やら何事も天命と奉存世話敷中にも樂しみは日々御座候申
上候迄も無御座一々天命と奉存候得者難有事斗にて暮居申候時に
一首

難有やかゝる目出度世に出て
たのしみ暮す身こそ安けれ

こゝろ一つにて苦樂はかつて次第也苦に成事も天に任自然をまつ
時は其跡者樂の種子成へし能〳〵天命の難有事を日々取外ぬ樣可
被遊候先は時氣御見廻迄如是御座候恐惶謹言

六月二日出

黑住左京

一筆啓上仕候先以向暑之時分御座候所定而御着被成已來御機嫌能
被成御勤候哉と奉珍重候隨而當地御二方樣御機嫌能被爲入殊に近
頃者至極御樣子宜敷相見へ大慶に奉存候此段御安意可被爲成候御
次に小子義も無異に相暮居申候乍恐御休意可被爲下候先達而申上
候通尊君樣之於御身之上者事十分に御たり被成候間何事によらす
若御心に御叶ひ被成ぬもの御座候はゝ是か滿つるをかぐ天よりの
御影とおほしめし被成候へは世に少も御不足は無御座候難有事を
知給ふて少も〳〵御不足を御出し被成間敷候何事も何事も心にう
かむ事を其まゝ申上先は荒〳〵如是御座候恐惶謹言

六月十六日出

黑住左京

一森彦六郎樣

尙々此書相達し候迄には最早甚暑に相成可申と奉存候折角時候御
自愛專一に可被成と奉存候

八六

志賀淳平樣

貴答

黑住左京

貴札拜見仕候如仰此間は御遠々敷御坐候然者段々御文面之趣一々
承知仕候幸ひ祭禮に御坐候間夫々御祈念可仕候しかし御戴物者此
方より令進上候いつも御念被入爲御初穗御國寶五封御備被成慥に
神納仕候扨御文面之所至極御尤には奉存候得共何事も心に成就仕
候時は形に成就仕候間申上る迄も無御座候得共御心に御疑を御は
なれ彌大丈夫に御定可被下候奉祈候事者厚く執行可仕候甚急亂筆
誠に御受取迄如是御座候以上

八月廿七日

五三

一筆啓上仕候時分柄冷氣彌增に御座候處益御機嫌能御勤被遊候由
奉恐賀候毎度尊書難有奉感拜候隨而當地　尊家御二方樣共不相替
御六つ間敷御機嫌能被成御坐奉賀上候御次に小子みな〳〵御同意
に相暮居申候乍恐御安意可被爲下候且又道も彌さかんに相成誠に
手も足も合不申候しかし御かけにて面白く日夜をゝくり居申候今
の樣子にては先は如何樣に相成候哉相知不申候乍恐御歡可被爲下
候いつも申上候通道と申者は誠に安き物也たゝ私のちへをはなれ
有かたきのみに日をゝくり候得はとしも不寄つかれも不出嬉敷と
おもしろきのみ也時に一首

あら嬉しかゝる嬉敷世に出て

くるしむ人そ憐れ成ける

何事も嬉敷〳〵にて世を渡り候得は嬉敷事斗自然と來り可申候い
つも世話敷大亂筆御笑草に御坐候此段御推覽可被爲下候恐惶謹言

九月十六日出

一森彦六郎樣

黒住左京

七七

一筆啓上仕候先以秋冷彌增に御坐候處益御機嫌能御出務被遊候由
奉大賀候隨而御留主樣彌御機嫌よく御六間敷被成御坐奉恐賀候御
次に小子義も彌以大開にて難有面白嬉敷晝夜を暮し候得はつかれ
も出不申候日々をゝくり居申候迚も手足も合不申候こん一はいに
仕跡は樂斗に御坐候先日も不斗

難有きまた面白き嬉しきと

みきを備ふそ誠成けれ

此心にて日々を御送り被遊候得は誠に〳〵生とふしと奉存候此度
彌世話敷大亂筆御推覽奉希候恐惶謹言

閏 九月二日出

黒住左京
（花押）

一森彦六郎樣

尙々次第に寒さに相成候間御自愛專一に可被遊候以上

四六

一筆啓上仕候時分柄追々寒冷彌增に御座候處益御機嫌能被爲成御
勤候由恐賀不少御事に奉存候誠以奉大賀候隨而御留主彌以御六間
敷御機嫌能被成御坐珍重不少御事奉存候御次に小子皆々御同意に
相暮居申候乍恐御安意思召可被下候道も益榮へ最早百か一つも手
に合不申しかし口釋者彌難有事御坐候何事も天命と奉存候奇妙成

事は會毎に御坐候時に一首

何事も天のなすのとおもひなば
くにもせはにも成らぬもの也

善惡共に天命とおもひ候得は少も苦に成こと無御坐候我ともさへ不仕候得は惡敷と思ふこともみな善事と相成候小子も三十年己前之大難か今此幸ひと相成候間難さへ難有に相成候間まして何事も思召通に相成候故彌以御生とふしと思召御勤可被遊候甚急荒荒如是御座候恐惶謹言

閏　九月十三日認

一森彦六郎樣

黒住左京
（花押）

一二六　一筆啓上仕候時分拇寒冷彌增に御坐候處益御機嫌能御出務被遊候

哉と奉恐賀候隨而當地尊家皆樣御機嫌能被爲成御坐御次に小子皆皆御同意に相暮居申候此段御尊意安く思召可被爲下候近頃者御袋樣益御樣子宜彌以御二方樣御ぐあひ誠に宜一節とは不思義成くらひに御坐候御安心可被遊候道もます〳〵はつし只今にては會毎に何程と申事難斗色々成難有こと數々御坐候中にも志賀淳平悴兒島へ參り罷歸り候時に大風にて舟もみじんに相成候時皆々命限り色と難義仕やう〳〵命を助り候て同人は一向に不知誠にくわひしんに居申候處不斗目をさまし見れは風もなし波も無御座候舟は水舟と相成候處不思義に長き舟とまを吹たるまゝ御座候而其舟に乘り其まゝ上り候處跡者大風大波也能々心をすまして見れは今迄乘りし舟もなき舟也誠に夢を見しことくにて其身少もぬれす跡の人

人は誠にぬれぬ處少もなく皆々さつする處此御守の御影成と誠に
人々きもをつぶし申候しかし道隨心の人々は彌難有さ相まし候得
共其外之人は何とも不思候何事も難有事斗に候得とも何とも不思
日をゝくり候かぼん人の常に御坐候時に一首
天地の其日の中に住時は
火にさへやけず水にをぼれず
申上度事は澤山に御坐候得とも誠に晝夜共せがまれ候故此手紙も
鳥渡少の間に相認大亂筆御推察可被下候恐惶謹言

壬　九月晦日に相認

黒住左京

一筆啓上仕候彌御機嫌能御務被遊候由奉恐賀候隨而當地御二方樣
彌御六間敷御機嫌能被成御坐御次に小子不相替世話敷難有相暮し
居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候道も益開大に難有奉存候只
今にては百に一つも千に一も相屆不申八方よりせめられ候得共難
有事はつかれも出不申しかし奇妙成事は日々に所々に顯道者一度
に開候樣に奉存候難有事者只今之樣子にて者彌以　天照大神御
開運之時節と奉存候其德所々色々とひらけ承り私も不思義と存候
事日々に申來りともに難有奉存候此段御悦可被爲下候何かと申內
直に秋に相成候得は直に御歸り被遊候樣相成候積る御咄可申上と
奉樂候先者亂筆只御機嫌奉伺迄如是に御座候恐惶謹言

四月十六日出

黒住左京

二〇　先月十八日出尊書同廿八日に相達し奉拝見候彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐賀候隨而當地尊家御二方樣益御機嫌能（不　明）次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候偖被爲仰下候御趣御城御燒失誠に大變成御事にて奉恐入候御事に奉存候何事も天命と奉恐入候しかし尊君樣に者萬事難有御事斗と被仰下於小子も無此上も難有奉存候いつも御尋被遣候道も彌以はつこう仕候迚も筆紙に者難申盡御歸り被遊候上にて御直に御咄可申上と夫のみ奉樂待上候今日も甚世話敷誠に大亂筆右尊荅迄荒々如此御座候恐惶謹言

六　月

黒住左京
（花　押）

弘化二年

二一七　過日者御尋問被下候由折惡出違ひ居申御殘多奉存候當春者御案內之通伊勢參宮仕存外隙入何や角や指湊ひ御察可被下候乍然　天照皇太神宮え奉　謁難有事無限別而此度者大道明かに相成申候附而者早春より丈八殿よりも御沙汰も有之貴所天心之御志御尤之御義に奉存候いつれ近日之內赤坂郡へも罷出申候間其節河本へ御出も被下候はゝ御直話可申述候其內御出府も被成候はゝ御立寄被下度乍便宜得御意如此御座候以上

五月十六日

黒住左京

八〇　志賀淳平様　貴答　黒住左京

御細書拝見仕候何かと御心配之程奉察候今夕御日待御祈禱之義者承知仕候何事も天命に御任せ被成候はゝ是非御かげ御座候と奉存候其内拝顔之節萬々御咄可申上候右御受取迄如斯御座候以上

閏　五月十五日

三五一　向暑之砌御坐候處彌御壯堅御勤被成候哉と奉珍賀候然者先達御頼之御札守進上仕候御納可被下候小子儀も誠にはけ敷事に相成此後者如何に相成候事やら相分り不申候何かと御心配奉察候得共吳々も天命に以誠御任可被成候御祈念之處者宜敷執行仕候且廿八日には森下氏に而御坐候間御家内様（不明）御出可被成候書外拝顔萬々可申述候以上

閏　五月廿三日　志賀淳平様　貴下　黒住左京

以下宛名順

一三　度々之尊書難有拝見仕候先以向暑之時分益御機嫌よく被爲成御出勤候由恐悦至極に奉存候隨而當地御宿元　皆々様益御機けんよく被爲成御座次に右御連中小子其不相替勢よく相暮居申候此段御懸念被遊間敷候扨御執行不相替被爲成候由感心仕候小子義も彌繁榮

と相成申候而時により候得はさばけ不申候しかし難有義奉存候乍
恐御歡可被爲下候此間も尾上廻會に段々咄出候中にまことに人身
上を相考候へはたとへは玉子のことし是を其まゝ彼おにのゑじき
に貴賤賢愚しやへつなく相成る也此道は彼おにゝくはれぬやうか
はをやふり出て見れは天地へ遊ひいつる也其玉子ぬくめるか執行
也此ぬくめやうの傳受と申は外にてはなし彼兼而祈奉る　日の御
神也是を今日の勤は其身そふはうに持前を勤て心に先三十日と思
日神と我心とを一つにして少も外なしにいたし候時間違なしにか
はやふれ元の人と成也としせんと申候所皆々彌神と成るに間違な
しと御悦に御座候申上度御事は山々御座候へ共まことに是を書間
も無御坐只今又社にて彼ちび筆にてにしり申上候御遠察可被爲下
候委細は追〳〵申上候恐惶謹言

五月十五日調

右源二

乾介様

尚〳〵時候御いとい御勤可爲成委敷は追〳〵申上候以上

略〆御尊免可被爲下候

〆

先月廿四日尊札相達難有奉拜見候如仰甚寒之節御坐候處尊君樣益
御機嫌能御勤被遊候奉恐壽候隨而當地尊家皆樣御機嫌能被成御坐
御次に小子御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意安く思召可被爲下
候乍末御賢父樣も益御快方に被成御座目出度奉存候今少と申位に
御坐候御悦可被遊候小子に致しても難有奉存候是も皆御高運に寄
候哉と奉存候先達而之御道歌難有〳〵との御道歌甚奉感心候其ほ

と結構成事は無御坐と奉存候其うらを申てみれは

またたらぬ〳〵とて世に住は
またたらぬこと斗なりけり

に相成申候兎角たる事を知るほと難有事は無御座と奉存候誠に恐敷ことは心の用ひやうと奉存候夫に付一首

生死も富もひん苦も何もかも
心一つの用ひやうなり

御笑〳〵道は一さひいかす事大一と奉存候何に付ても御いかし可被遊候近頃の目付彌いかし候事のみと執行仕候是則　天照大神の御道と奉存候生とうし所一偏に御執行奉願候恐惶謹言

十二月十六日出

黒住左京

石尾乾介様

尚々時候御厭ひ御出務可被遊候以上

石尾乾介様

返答無事

黒住左京

略〆御尊免可被爲下候

先月十六日出之尊書有かたく奉拝見候如仰未餘寒甚敷御座候處其御地　尊君様益御機けんよく御出勤被遊候由奉恐壽候隨而當地尊家皆様御機嫌能被成御座次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐尊慮安く思召可被爲下候且又御道歌に

天地の有かたいこと數れは、、、

との御道歌誠に〳〵奉感心此上もなき有かたき事に奉存候兎角通

り過に成かちに御座候たゝ心一つの用様にていか様にても相成申候　尊君様の思召の處え皆々被參候者於小子も少も思ふ事は無御座候に色々の人御坐候而是には因り居申候誠に御歸も天照大神の御心を穢し候人折節候而今少に相成候間奉尊顔候而萬々積御咄可申上候先は尊答迄如斯御座候恐惶謹言

二月二日　　黒住左京

石尾乾介様

尚々乍末御尊父様も益御順快被遊候間此段御尊意易く思召可被遊候以上

二八

追而申上候當月二日三日四日と其御地に居申候寛山先生下向にて口釋御座候大勢參り候間小子も參申ちようもん仕候面白事に御座候兼而小子とき申所に大意は少も違は無御座候得共同人は道具やにて古人の道具澤山出其中に段々面白き事御座候しかし門人の内も町家在方七八人も參り承り候しかし活物は少も出不申候誠三千人の餘も門人御座候大先生にてあの所にて御座候得は御内々なから大に安心仕候委敷は尊顔萬々可申上候以上

石尾乾介様　　黒住左京

要用　　無別條

三三

未餘寒嚴敷御座候處其御地尊君様益御機嫌能御出務被爲成候由珍重不過之御事に奉存候隨而當地尊家皆様御初右御連士小子共御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候毎度道之事御尋被

遣當春は何とそ發も可仕哉に奉存候しかし大せひ參り候共役に立不申只壹人にても誠の人參り候得は道は開可申と奉存候萬事天命次第と奉存候此度も世話敷先は時候御見廻旁々如斯御座候恐惶謹言

正月十六日出　　黒住左京

石尾乾介様

尙々右之品段々御役介難有奉存宜敷御頼申上候以上

先月十五日御調之尊書同廿六日夕頂戴仕拜見仕候如仰餘程春暖相催暮能相成候處益御機けんよく御出務被爲成候由目出度珍重不斜奉存候隨而當地尊家皆樣御次に小子皆皆御同然に相暮居申候乍恐此段御尊慮安く思召可被爲下候且至而御内々にて被仰聞候趣誠に

難有御事奉存候近頃之小子存寄には迚も何とあせり候ても相叶不申と奉存候ゆへ誠に貴賤共に見ごろしの事斗御座候得共致し方無御座たとへ門人中たりといへとも中々おもふやうに參り不申皆是も世の流こうなかれ氣毒なからいたし方無御座所詮未時の至らぬのと我壹人をつゝしみたる事斗に居申候所に御座候若尊君樣仰の事成就仕候はゝ龍の雲を得たる所と奉存候誠に難有事爲過之事は無御座候仰之通り誠に邪の中魔界に御座候間如尊命小子よりは少も口外は不仕候自然の時を相待奉候尊君樣御歸國被遊候はゝ御直に委敷可申上候吳々も難有奉存候折節指急誠に尊荼迄大亂筆御尊免可被爲下候恐々謹言

二月二日出　　黒住左京

石尾乾介様

尙〳〵時候御厭ひ御出勤可被遊候本文申上候通り少も少も他言親子たりとも口外仕間敷候又々以上

〆　略〆御尊免

三三七

石尾乾介様　　黒住右源二

尊答

當月三日四日御調御念書御貳封同十六日相達毎度〳〵難有拜見仕候彌御機けんよく御出勤被爲成候由目出度難有奉存候隨而當地御屋敷御兩所様初右御連中不殘小子共彌以勢よく相暮居申候乍惶此段御尊意安く思召可被下候一先達之御細書毎度〳〵感心仕候且また御詠歌甚感入仕候至而宜敷と奉存候其處つとまり候得は此上は

無御座候しかし餘り〳〵極意過て候やうに奉存候中々形御座候ては其所つとまり不申候たゝいうて見つくに相成可申やと奉存候其御歌を相考候て小子一首只今仕候

たもつともまたすつるともおもふまし
たゝたのしみの心はかりに

同一首

樂しみも我たのしみと思ふまし
たゝ天つちのたのしみにして

と仕候こゝろも日月より來り給ふこゝろ也形も天地のしせんと生み給ふ形なれは我と無理にすつるにも及不申何事も天地とともに樂む誠に〳〵難有事斗御坐候猶委敷は追〳〵申上候以上

九月廿六日調

乾介様

尚〳〵時候御あとい被爲成御勤被成可被下候以上

三三八　當月二日之尊札同十二日に相達難有奉拝見候先以暑に趣候處益御機嫌能被成御出勤候由珍重不少御事に奉存候隨而當地御屋敷　御二方様初右御連中小子皆々御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意易く思召可被遣候且先達而は心の御道歌甚面白く御事理の當然に御座候小子も一首仕候是も古人の歌に祈念をしてやくにたつかたゝぬかと申答に

祈りをは深山の奥の山田もり

かさして鳥かたつとおもへは

申歌皆々感心に御座候得共小子心には少心に落付不申候此歌をふまへて小子一首

祈りなは叶ぬ事は無物と

思といのる心なきとは

誠のいのりには叶ぬ事は無物と申事心に覺へ有なから祈心にならぬ事甚かなしく候祈は日のり御座候由本躰の祈りに而叶ぬ事はなき事也爰を相考候へはかさしの方も宜敷哉今日も世話敷先々筆留候恐惶謹言

五月十五日

黒住左京

石尾乾介様

尚々次第極暑に相趣候彌御あとい可被遊候當地共は此節毎土用中

よりも暑嚴敷御座候甚日干に而猶々嚴敷御座候以上

餘り重高に相成候間

石尾乾介樣

尊報

署〻御尊免可被爲下候

（御名切抜）

無別條

又々申上候御殊多中に度々御祓御越し彌御武運長久之ため神前

え奉備候又々以上

毎度御細書被爲下難有拜見仕候時分柄春暖相催候所先以其御地

尊君樣益御機嫌能被爲成御出務候由珍重不斜御事に奉存候隨而當

地　尊家皆樣御堅固被成御座次に小子皆々御同然に相暮居申候乍

恐御尊意安く思召可被下候且道之事毎度御尋被遣難有大分面白く

樣子に御座候つら〳〵相考候所道は自然と天より顯れ候道を何と

なく私の心より廣め候により是にしたかう人も十人は十色に己心

の望を加へ用候まゝ初は心のまゝに相成候樣に御座候得共いつの

間か本を忘候まゝ色々さ道の邪魔出候而道を穢し候と相見へ候し

かしなから爰か道の誠は難有ものと奉存候小子近頃の執行口は何

事へも兎角物に不寄樂處を相務申候しかし向ふ物を外くには無御

座たとへは鏡に影をうつすか如くのけは少も跡なきかことくたゝ

夜は宮に入壹人心をすますといへとも少も淋敷事なくさらは市中

に居申とも是を嫌ふと申事は無御座候かく申は我と大德の樣に自

まんら敷甚御座候得共其位は勤り候得共我と我心にたつね候得は

中々目を付候處えは十か壹つもつとまり不申候委敷御事は尊顏な

らては不叶申候先は尊答迄如斯御座候恐惶謹言

三月十六日

石尾様

尚〳〵時候御厭ひ御出勤可被遊候以上

〃

先月十八日出尊書相達し難有奉拝見候時分柄冷氣彌増に御座候所益御機嫌よく被成御出務候由恐悦至極に奉存候随而當地尊家皆様御機嫌能被成御座次に小子皆々御同意に相暮居申候此段尊意安く思召可被爲下候乍末　善左衛門様も彌御順快被爲成候間御尊慮安く思召可被遊候先達一万度御心願甚奉感心候小子も宜敷御心願申上候誠に御年來と引合候而は不思義に御順快被成候兼々御信心被

（御名切抜）

成候所よりと奉存候少も御心配被遊間敷候兎角信心は心よはくてはやくに立不申やうに奉存候何事も〳〵天に任候程つよき事は無御座と奉存候道も先折合申候先は尊答迄如斯御座候恐惶謹言

十月十六日出

石尾乾介様

黒住左京

尚〳〵時候いとひ御出務可被遊候以上

御出勤專一と奉存候以上

尚〳〵御歸りも近寄候間積る御咄申度と樂奉り候時候御ゐとひ

御繁榮之所度々御念書難有拜見仕候先以其御地

尊君様益御機嫌能御出務被爲成候由珍重不斜御事に奉存候随而當地尊家皆様御機嫌能御座次に小子皆々御同意に相暮居

申候乍惶此段御尊意安く思召可被爲下候且道之事御心切に毎度御尋被遣難有奉存候何とやら又面白樣子に御座候不思議成物に而御座候町方新會も人は未多勢ひには無御座候得共一心は中〳〵今迄のやう成事にては無御座候とかく右の御人は引色（不明）相見へ居申候何事も天命次第と奉存候始より申上候通り小子道には無御座もつたひなくも道は　日の神の御道に御座候凡三千世界に此道をはづれたる人は一人も有間敷と奉存候我とくらき所を望人は如何成事に御座候哉と奉存候右の人小子に目を付られ候は甚御迷と奉存候小子は愚釋迦孔子たりと申とも其人に目をつくるは迷也其德こそ尊けれ其德は直に天德也是を離るれは外道也本より小子に少もとくは無御座候天の道にこそ心をつけらるへきに甚御氣毒に奉存候委敷御事は尊顏ならては難申盡先は尊答迄如斯御座候恐惶謹言

二月朔日社に而認　　宗忠

石尾樣

石尾乾介樣

尙々時候いとゐ御出勤被成可被下候たとへ海山隔候共御兩所樣御事は神事度事にはする事無御坐候以上

石尾乾介樣　　黑住右源二

（尊答無異）

〆　　畧〆御尊免可被爲下候

毎度〳〵御念書難有奉拜見候先以其御地尊君樣益御機嫌よく被爲

成御勤候由珍重不過之恐悦奉存候隨而當地御屋敷御兩所樣初例之御連中次に小子共無異に相暮居申候乍恐御心易思召可被爲下候且道の方も種々に相成或廣り又は疑ひ正は彌難有相まし邪は彌邪に相成候しかしたとへ何程道を守候共心いん氣に相成候はゝ出情相成難く申候何とそ春の氣に御成候而御執行可被成候今日も甚手誠御答迄大亂筆に而如斯御座候恐々謹言

十月十五日極晩

乾　介　樣

右源二

四三

一筆啓上仕候時分柄春暖相催候所　尊所樣御機嫌能被成御勤候由珍重不斜御事に奉存候隨而御屋敷御家内中樣益御機けんよく被成御座御次に小子御同意に罷暮居申候乍恐御休意安思召可被爲下候

毎度御勇々敷御尊書被爲下難有奉拜見候

一道も何とやら開口にも相成可申哉と奉存候さる人書物に致し世上へ廣め度候よし此節其氣さし出申候しかし大分大氣成事にて出來仕候得は宜敷御座候が是も天命次第と奉存候於小子者少も望は無御座皆天命に打任居申候委敷追々可申上候先は時候御見舞迄如此御座候恐惶謹言

二月十六日

黒住左京

一森彦六郎樣

四五

一筆啓上仕候時分柄冷氣彌增御座候處益御機嫌能御出務被爲成候由奉恐壽候度々之御念書被遣忝拜見仕候誠に先達ては御内方幷御勤向段々御心配重り候由御申越被爲成候に付御母君樣にも御心配

被遊小子も御尤に奉存候間段段に御祈願申上中にも伊勢幷金毘羅
様へ奉祈願其分は荒荒申上候と奉存候時に先月二日出之御細書御
母君様誠に御感心御機嫌に御座候しかし先便にも申上候通り世の
中は満れはかけかけれは又自然と満つる者也悪も善も皆自然にて
一切天に任する時は皆なはのことしと奉存候例の雨降はふれかせ
吹はふけにて御座候其節古田氏の事御申越被下御受も不申扱甚御
氣毒に奉存何と申上方も無御座次第御座候兼々御同人には左様成
向の有御人にて小子共度度覺へ御座候しかし御文面之所は至極御
尤に奉存候裏之所は中々通間敷と奉存候乍去先兼而其所が病氣と
奉存候何事も〳〵ゆる〳〵と御懸合可被成方宜敷と奉存候先は時
氣御見廻旁々如斯御座候恐惶謹言

九月二日出　　黒住左京

一森彦六郎様

尙々御地は如何に御座候哉當地ともは此一兩日は誠に寒中之様に
御座候今村祭りはかたひらの時節に御座候所段々重着仕候ても惣
身ひへ候位に不順に御座候益次第に寒さ彌増に候間時氣折角御自
愛可被成様奉存候以上

一筆啓上仕候未殘暑甚敷御座候所先以尊君様益御機嫌よく御勤被
遊候由恐悦至極に奉存候隨而當地尊家皆様御始小子皆々御同意に
相暮居申候誠に近頃追々に御勤向之御様子承り扱〳〵難有奉存候
兎角世の中の人始めは却而宜敷御座候か後には自然どちへかつき
其智か邪魔に成り天命をへだて候と奉存候今の所にて何もかも天

命に御任難有一ぺんに可被成候誠に先達而も此手紙調へ置候所便
り無御座候而間に合不申乍延引一所に指上申候度々に御念書被遣
毎度〳〵奉感心候此方にても日々御繁榮之所奉祈候先は荒々如斯
御座候恐惶謹言

七月二日出　　黒住左京

一森彦六郎樣

五四

尙々今少殘暑に御座候間萬事御用捨被遊御勤可被遊候以上

一森彦六郎樣　　略〆御尊免可被下候

尊答無異　　黒住左京

一筆啓上仕候殘暑未甚敷御坐候處彌御機嫌能被成御勤候由奉恐賀
候隨而當地尊家御兩方樣御機嫌よく御次に小子義も益世話敷相暮
し居申候乍恐御安意可被爲下候先達も度々尊書被爲下難有奉拜見
候いつも〳〵奉感拜候小子義も近頃者大開にて難有奉存候しかし
何事も十に一つもととき不申候夫故度々御文通申上度存念には奉
存候得ともつひには御無音申上候毎度申上候通道はたゝ何ともか
とも分別を取外只日々之難有事斗少も〳〵取外ぬ樣に被遊候得は
直に此處か高天か原と奉存候吳々も只今迄之思召之處か誠に大一
之御事に奉存候つら〳〵世之中之人之心をくはんするに貴賤共に
氣毒成事斗に御座候我道に入給ふ人々は大に安心成事と奉存候

向ふこと皆樂とおもひなはこれぞうき世の大德という

御笑納〳〵何事も心次第と奉存候いつも世話敷大亂筆荒荒筆を留
候恐惶謹言

七月十六日出

一森彦六郎樣

黑住左京

尙々時氣御自愛大一に可被遊候以上

五五

一森彦六郎樣

尊答無異

略〻御尊免可被爲下候

黑住左京

一筆啓上仕候先以時分柄向暑に相催候處其御地尊君樣益御機嫌能
被爲成御出務候由目出度御事奉存候隨而當地　尊家皆樣御機嫌能
被成御坐次に小子皆々御同意相幕居申候乍恐御尊意安く思召可被
爲下候先達も被仰聞候御文面甚感心仕候何事も〳〵少も御分別な
く天命に御任被遊候處無此上も難有御事奉存候時に一首只今侍
る

難有中に住ける神々を

猶有かたくおもふ人々

と仕候此人々こそ御守り被遊候哉と奉存候天下に一番と申位の人
たりとも此處わすれ給ふ人は末はつまらぬ物と奉存候先は荒々如
斯御座候恐惶謹言

五月二日出

黑住左京

一森彦六郎樣

五六

一筆啓上仕候時分柄暖和御座候所益御機嫌能被爲成御勤候由奉恐

壽候隨而當地御尊家皆樣御次に小子皆々御同意に罷暮居申候乍恐
御安意思召可被爲下候毎度御尊書被遣有かたく奉拜見候いつも
〳〵御勇々敷尊書にて難有奉拜見候幾度申上候も其本者一つにて
別に申上る事無御座候たゝ此☼一つにて外に道者無御座候誠に
近頃者奇妙成事所々に顯彌以世話敷相成只今之樣子にて者如何樣
に相成候やら相知不申候何ことも〳〵御直ならては難申盡御座候
先は時候御見廻旁々且尊答迄如斯御座候恐惶謹言

二月十六日出

一森彦六郎樣

黒住左京

尙々時氣御厭萬事御用捨專一と奉存候以上

略〆御尊免可被爲下候

一森彦六郎樣

尊答無事

黒住左京

一筆啓上仕候冷氣彌增に御座候所益御機嫌能御出務被遊候由毎度
御念書奉感心候隨而當地尊家皆樣御機けんよく被成御座候御次に
小子皆々御同樣に相暮居申候乍恐此段御安意思召可被爲下候道も
先折合居申候兎角生死者毎度申上候通り心斗と奉存候時に

心から生る人こそかしこけれ
しぬる人こそあほふ成けれ

ます〳〵御いかし可被遊候申上度事も色々御座候得共筆にては難
盡候恐惶謹言

九月十六日出

黒住左京

一森彦六郎樣

尙々時候御ゐとひ可被遊候以上

五八

一森彦六郎樣

尊答無事

略〆御尊免可被爲下候

黒住左京

毎度御細書難有奉拜見候先以　尊君樣益御機嫌よく被爲成御勤候由奉恐壽候隨而當地尊家皆樣御機嫌能被成御坐御次小子皆々御同意に相暮居申候乍恐尊慮安思召可被爲下候近頃誠に御多用奉察候しかし此迄もなき御運氣宜敷難有御事奉存候乍去天地は滿るをかくと申事御座候間萬事御つゝしみ其上御信心大一に可被遊候其外御心いかにも廣く御持可被遊候申上る迄も無御坐候得共彌以難有に御まかせ可被遊候委敷者追々可申上候恐惶謹言

十月二日出

一森彦六郎樣

黒住左京

尙々時氣御ゐとひ御出務可被遊候以上

六二

改年之御慶重疊千里同風申收候先以　其御地　尊君樣御機嫌能御越年被遊候由目出度奉壽候隨而當地　尊家皆樣御機嫌能御越年被成御次に小子義も御同意に嘉年仕候乍恐御尊慮安く思召可被爲下候且道も色々に相成申候委敷者追々可申上候右者年始之御祝詞迄如斯御座候猶期永春之時候恐惶謹言

正月十六日出

一森彦六郎樣

黒住左京

尙々冬内には少々御心配筋御尤には御坐候得共邪は正之元と申候得は跡は皆善事と相成申候何事も左樣思召可被遊候又々追々申上候以上

七三

〆

毎度御細書被爲下難有拜見仕候時分柄春暖相催候處先以其御地尊君樣益御機嫌能被爲成御出務候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地尊家皆樣彌御堅固に被成御座次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意易思召可爲下候申上候迄も無御座候得共萬事天命に御まかせ何事も〳〵御大切に御内ば被成候方宜敷と奉存候古語申候通過たるは不及こととやらたゝ天地の難有事御わすれ被成間敷候爲指御事も無御座候得共右は時候御見舞旁々斯のごとくに御略〆御尊免可被爲下候

座候恐惶謹言

三月十六日出　　黒住左京

一森彦六郎樣

七六

（表面破損）

〆

尙々時候御厭ひ御出勤可被成候以上

略〆（破損）

先月十三日出之尊書相達奉拜見候彌御機嫌能御出務被爲成候由奉恐壽候隨而爰元御留主樣御機けんよく被成御坐次小子義も無異に相暮居申候乍憚御安意可被爲下候且尊書之趣甚以感入奉り候何事も〳〵天命次第との御事其所より外に大丈夫は無御事と奉存候右之趣御母君樣え申上候樣御申聞被遣委細奉承知候御安心被遊候所

此上之事は無御座候何かと申内御歸國も日々近寄候哉と奉存候し
かし尊命之ごとく天命次第ほと慥成御事は無御座吳々も尊命之所
に御座可被成候先は右尊荅迄如斯御座候恐惶謹言

四月二日出

一森彦六郎樣

黑住左京

尙々時候折角御自愛專一に可被遊候以上

三四九

〃

一森彦(破損)郎樣

黑住(破損)

甚暑難堪御座候處彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐賀候隨而當御館皆
樣御機嫌能御次に小子彌以世話敷難有相暮居申候其外道連中貴賤
とも益榮に御出精に而誠に日々に難有事所々に顯候間迚も上て

(虫 喰)いとま無御座候(虫 喰)御歸り被遊候上に而(虫 喰)覽に入度
奉存候乍然此手紙相認候間も無御座候間(虫 喰)途中に而御覽之通
大亂筆に而只奉伺御機嫌候御推覽可被爲下候先者荒々大亂筆御仁
免可被爲下候恐惶謹言

(破損)月(破損)出

黑住左(破損)

五七

丸事は○事也是則天照太神樣の御心と御一たい也是をいためるを
穢と申也けかれは氣かれ也夫故腹をたて物を苦にするを穢の第一
とする也今日をさかへに御陰氣を御さり可被成候申上たくぎは澤
山御座候得とも誠に世話敷夫ともまはらぬふて跡先御推覽可被遣
候あら〳〵かしく

今月今日

(御名切抜)

一森御姉様

七九

牛窓にて

淳平様

貴答

急切〆御免可被下候

黒住左京

廿五日出御狀今日被下拜見仕候如仰御慶目出度申納候先以貴家皆
様御揃御迎陽被成候由目出度奉珍壽候隨而小子義も御同意に嘉年
仕候乍憚御安意可被下候何か御心配殊に甚以御事多と奉察候且元
旦之御祈禱並　内宮樣御祓則御人へ相渡し申候間御頂戴可被成候
折節指急右貴荅迄委敷者來月參上候而萬々申述候早々以上

正月廿六日

尙々小子義も年明早々より自然之大執行天より被仰付難有御事に
奉存候何事も〳〵拜顏にて萬々可申述候以上

八一

牛窓にて

淳平樣

貴答

略〆御免

昨十一日夕之御認貴札今四つ時相届拜見仕候彌御堅康被成御座珍
重不少御事奉存候御文面に九日御認御狀御指出被成候由是は未相
達不申候相届次第拜見仕候且六月祓後御心持段々難有事御浮被成
候由御申越し被成於小子も難有大慶に奉存候いつも〳〵御文面之
趣御心さし感心仕候御祈念之所者承知仕候委細者盆後參上にて萬

々御咄可申述候頓首

七月十二日

志賀淳平様

貴答

八四

昨日者御手紙被下拝見仕候得共大勢參り候時故御荅も不申候扱未ぎやく御忘不被成候よし御難義とは奉存候得共初と申者は左樣物にて御座候追々御忘可被成候且外に大難之義御座候由被仰宜敷御祈念仕候又みくじも奉伺候所如仰大難は大難に御座候御祈念仕是を境に御一心に御疑を御はなれ被成候得は御まぬかれ被成候神圖相成候此段御安心可被成候小子も由斷不仕御信心仕御加勢可申候彌御安心可被成候其内拝顔候て萬々御咄し可申候右貴答迄如斯御

黒住左京

二六六

座候いつも急早々以上

八月廿三日

尚々御保養第一に可被成候

八五

如仰新春之御慶重疊申納候先々貴家皆樣御揃御堅康に御越年被成目出度奉存候隨而野子事も無異嘉壽仕候乍憚御安意可被下候且又御別紙之趣一々承知仕候御祈念之義は厚く執行可仕候年内より數々御心配之御樣子奉察候しかし段々に筋立候由今少之所も彌御一心之所から御安心之姿と奉存候吳々も御大丈夫にて人に御隨被成候はゝ自然と道筋も開け候哉と奉存候神圖も先宜と奉存候折節急鳥渡御請迄如此御座候猶期永春之時候恐惶謹言

黒住左京

正月十二日

二六七

志賀淳平樣

尙々昨年も不相替忝奉存候其内參上にて萬々御咄し可申上候御札
守段々及延引候則指上候間御納可被下候以上

八七

志賀淳平樣

貴答

黒住左京

尙々最早段々得人候間誠に略文御推覽可被下候

拜見仕候御文面越委細承知仕候何事も天命に御任可被成候兎角先
を枯さぬやう萬事御斗ひ可被成候御祈念之處は厚く執行可仕候御
神閣もとかく御陰氣が御運之邪魔と相成可申と奉存候何事も納り
大一被成候はゝ御開運之時節も不遠と奉存候誠に大丈夫に御一心
御納可被成候其内拜顏にて萬々御咄可申上候以上

三月廿二日

八八

志賀淳平樣

貴答

黒住左京

尙々度々御念被入御初穗金壹封御備慥に神納仕候

昨日御認之貴札相達拜見仕候以來彌御壯健に被成御坐珍重不少奉
存候然者御細書之趣一々承知仕候尤相者之申候義委敷被仰下御祈
念義者急に取懸り執行仕追而御札守令進上候申上る迄も無御座候
得とも少も〳〵御氣に御懸被成間敷候其處が祈り之場所に御座候
間最早御心にさつぱりと御濟し可被成候

一段々何か御心配筋委敷御申越し一々承知仕候乍併是迄之所を只
今之處へ御出ぬけ被成候くらい之御運に御座候間今少之内にて御

安心に御成可被成候牛窓方者父子ともへ委敷小子心持にて可申述候何方も大丈夫に御心を御すへ被成御事多之中にも御心者寛々と御攝へ被成御斗可被成候其中小子も鳥渡御見廻申上御直に御咄し可申上候甚世話敷亂筆貴答迄如斯御座候以上

八月四日

八九

拜見仕候先御快方之御樣子大慶に奉存候何か御心配之趣奉推察候御祈念之所者委細承知仕候何事も天命に御任被成候より外者無御座候追々者宜敷御事も出來可仕と奉存候今日も甚世話敷御答迄如此御座候早々以上

十月十五日

志賀淳平樣

黑住左京

九〇

廿日出之貴札相達し拜見仕候如仰先日は御入來被下忝何之御風情も無御坐御殘多に奉存候已來兎角御さつばりと不被成候由嘸御難義と奉遠察候右御祈念且兼々御願望之所夫々於神前冬至に執行可仕候處者承知仕候先日も御咄申候通何事も天命に御任せ兎角下腹に御心をしつめ則雷復之如くに陽氣自然とはつし候樣に被成候得は開運不被成と申候事無御座候吳々も御祈念之所は小子力一はいに可仕候

一先日河上氏相見へ同人へも厚く相賴申候得とも兎角未時節到來不仕と同人も甚御堪かたく被申候

一片上一件之義を先日七島やへ相咄候所同人申候にはケ樣之願付之事は家屋敷無御坐人は村役人申取候而相濟候筈と思はれ候と同

人も甚難御堪申居申候申迄も無御坐候得共御難義之趣を委敷御咄
しにてていかにも打しをれて致し方無御座由御なけき被成候得は村
役人も致方は無御座と奉存候是は村役人之云取にて名を替へ處々
左樣之人只今無よし御申呉候得は相濟可申事之樣に相咄申候呉々
もまげて下に入御頼被成候方宜敷哉に奉存候何分にも御いかりは
御出し不被成しつかに御懸合可被成候方宜敷と奉存候今日も甚多
用大亂筆殊に愚文相分不申候御考へ之上御覽可被下候先は御荅迄
如此御座候頓首

霜月廿二日　　左京

淳平樣

尙々奈良屋喜藏殿留主へ御出にて御坐候よし乍憚宜御頼申上候備

中御病人之處も色々相考へ居申候若得參上不申者厚く御祈念可仕
候此段も御同人へ宜敷御傳へ可被下候奉頼候以上

九一　廿日出之貴札相達拜見仕候先日者御入來被下末麁成次第にて御殘
多に奉存候已來兎角御勝れ不被成由御難義と奉存候就右御細書之
趣者委細承知仕候段々之御祈願夫々冬至には於神前宜敷心願可仕
候乍去御成就之所は御一心に御座候小子力一はいには執行可仕候
左樣御心得置可被下候御開運之所心願者不及申段々心安人へ相咄
置候得ども未好手懸りも無御座今少時節至り不申候と奉存候何事
も自然に御任可被成候今日も甚世話敷貰荅迄荒〳〵如是に御座候
謹言

霜月廿二日　　左京

淳平様

尙々冬至御初穗一封御備慥に神納仕候本文に申上候通冬至をさかへに御心から一陽を御まし可被成候其心得にて執行仕候委敷者拜顔萬々可申述候以上

二

尙々御札守今少延引仕候段々に奉祈候而追而令進上候左樣思召置可被下候以上

御細書拜見仕候昨晩者參上得拜顔之大慶不少御事に奉存候然者御文面之趣萬事奉察候御祈念之義者委細承知仕候いつも御念被入御初穗一封御備慥に神納仕候此上者御かけにて御氣遣ひ無御坐と御一心を御すへ可被下候たとへ御祈申上候ても御精よはき時は祈候ても神德薄く誠に大丈夫に思召可被成候委敷者追而萬々可申上候折節得人貴答まて如此御座候早々以上

八月七日

黑住

志賀樣

九三

拜見仕候誠に及月迫彌御繁多と奉察候御腫物も未さつぱり不被成候由嘸々御困り可被成奉察候不相替歲暮之爲御初穗と御國寶一封並元旦御初穗共御備被成下いつも〳〵被入御念難有幾久敷神納仕候

一御文面之趣拜見仕候所大に御心配之趣一々拜見仕候御祈念之義者いかにも宜執行可仕候定而御かけにて御開運被成候哉と奉存候如何にも御心御大丈夫に御持可被成候且外御額之義承知仕候元旦相調可申候甚急御答迄如是御座候以上

十二月廿五日

志賀　様

尚々皆様え宜敷御申上可被下候

一〇〇　京左衛門　様

彌御堅康に被成御座珍重奉存候然者承り候得は七日七夜だんじき被成候由宜敷は存候得共御親父様大御心配と奉存候得は此度は五日五夜にて御やめ可被成候大願成就うたかい無御座候此義には私承り候事も御座候故先五日に御定可被成候委細者追而委敷可申述候以上

十一月十六日

黒住

一〇一　文左衛門　様

左京

御細書拝見仕候如仰殊暑甚敷御座候処彌御揃御堅康に被成御座珍重不少御事に奉存候先達而中村氏より何か御心配筋之義承り委細承知仕候得共小子も遠方へ罷越し先達而彼人方へも態々参り候得共出違同人此間参り候得共小子又出違に相成候得共右之一件者夫と無御座貴所様御心得之所者去人へ委敷相咄し置申候間御心配者被成間敷田中之方又彼人両人共彌以厚く私考を以相咄置可申候且御祈念之儀者猶々承知仕候何事も少も〳〵御心配被成間敷候天道様へ御任せ被成候はゝ皆明り者入可申候折節得人大亂筆貴答迄如此御座候早々以上

七月十六日

尚々先日不相替御念被入段々忝奉存候委敷者拝顔にて萬萬可申述

一〇二　尙々此文面御覽之上は御火中被成可被下候極内被成可被下候

御紙面被遣拜見仕候如仰向暑之節御座候所皆々樣御堅康に被成御座候由珍重不少奉存候然者和氣丑之介殿御事委敷御申越し被下承知仕候一節者大に宜御座候處又々指發り候由扨〳〵御互心苦敷事奉存候しかし又々追日御快方之由先安心仕候乍去未御顏色も不宜御座候よし就右小子參上可仕旨御申越し被下御尤之御事に奉存候左も無御座而も參上申御樣子も直に見度と兼々之存念に御座候得共小子義も少々平生にも無御座おして遠路步行難仕夫故御無音申候乍併宿元にては少も用捨者不仕外にも至而懇意成人誠に大病にて大心配仕候中野屋此度之御病氣誠に六ヶ敷神閣にて小子參上五

日七日御ましない仕候而も其位之事にて御快方と申樣成御病氣には無御座と奉存候間小子於神前一万度御祓心願仕其後晝夜執行仕申候得共中々大數に御座候間はかとり不申候しかし此義は貴所樣迄御内々に申上候參り申參申ぬと申やう成ことには無御座小子におゐてはこんかぎり執行可仕つもりに御座候及ぬ所は致方無御座候得共右之次第に御座候此段御含置可被下候是も道之ためと奉存候御同人御賴も無御座にヶ樣成心願仕候も皆自然之成事と奉存候其内彌何つと申事は得申上ず候得共御見廻申度とは奉存候しかし是は少も御當には被成被下間敷少にても御爲に宜敷やうには油斷不仕候兎角神閣六ヶ敷には心配仕候申上度義は山々御座候得共筆紙に難盡誠に亂文御推察可被下候書外拜顏にて萬萬可申述候以上

六月九日

大森武介様

黒住左京

尙々乍末御家内様方へ宜御申上可被下候御序に和氣御病人へも能々御傳聲奉頼候右一件者御内々被成置可被下候先は貴荅迄如此御座候又々以上

三五〇 時分柄暖氣彌増に罷成居申候處其御地各様御揃被爲成御堅剛に被成御座候哉と奉大喜候然者小子義少々つかれ出し當月三日には得參上不仕心外に御斷申上候若御便りも御座候はゝ宜敷御斗置可被下奉頼候しかし少も〳〵御心配者被下間敷最早大方平生に相成候得共今少遠路六ヶ敷候故用捨仕候尤私身上には時々は道之元入に而御座候又難有事者一段進み居申候此段者御歡可被下候不快中亂筆御推覽可被下候不具

二月廿七日

大森武介様

黒住左京

一〇五 御手紙被下拜見仕候如仰未殘暑嚴敷御坐候所其元皆々様御揃御壯堅に被成御坐候由珍重不過之御事に奉存候誠に盆前には參上申段々に御取持被下忝仕合に奉存候且此度御願書一通御指越被成御心さし感心仕候定而御成就と奉存候御祈念之儀者承知仕候申上る迄も無御坐候得共何事も天命に御任せ可被成候右御荅迄荒々如是御座候恐々

八月朔日

黒住左京

黒田清右衛門様

尚々乍末筆皆様へよろ敷御申上可被下候以上

一〇六

〆

作州

蜂谷俊造様

貴答

遠路之所御手紙被下忝拝見仕候彌御繁榮に御座候由大慶至極に奉存候於小子も道大開と存重々難有仕合に奉存候何方にも色々奇妙成事其數難申盡候しかし御文面にも御坐候通彌以まんしぬやうにと申所要用と奉存候且小兒養いくの義も拝見仕候此義者文通にては難申述候先承は承置候如仰作州共は人氣甚以感心仕候御國とも中々未左様成場所へ參り不申候是も今少し時之至らぬのと奉存候

二三

備前

黒住左京

しかし奇妙成事日々に顯れ候間最早時節到來と奉存候餘書御使より御聞可被下候荒々以上

二月十三日夕

一〇七

〆

蜂谷俊造様

尚々時氣御ゐとひ御勤可被成候

署〆御免ん

黒住

うへた御内室様

御返事

先月九日出の御文被遣忝はいしう〳〵まつ〳〵御心よろ敷いよ〳〵打つゝき御快氣被成候よし何より〳〵御目出たく御嬉敷存上う〳〵つきまし此方みな〳〵同し御事に相暮居申う〳〵はゝかりなから御

二三

心もしやすくおほしめし下され候御しゆきようのところはらをたてす物をくに不被成との御やうす扱〳〵感心仕候それのみが一大事に御座候いよ〳〵何事もよき事のみとりて悪き事は御すて被成天めいの難有事御たのしみ被成候右は御返もしまてあら〳〵めて度〳〵もし

卯月六日

尚々末もしなから皆々様へよろ敷御たのみ申上ゟ〳〵奥様へ御文上候もいかゝとはそんしゟ〳〵得共まことに天照大神様へ大に御ゑん深きおまへ様ゆへかやうに御返事申上ゟ〳〵それゆへ毎日〳〵朝晩御はんしやうの処をはいし上ゟ〳〵是とても私の御禮には及不申日神様へいよ〳〵御禮御頼申上候まつはあら〳〵筆をとめゟ〳〵めて度〳〵もし

細〳〵この御ふもし忝はいし参るらせ候先達而は旦那様も御機けんよく御歸り被成候由御前様にも益打つゝき御快氣被成候よし扱〳〵目出度小子までも難有此方にても御噂のみいたしゟ〳〵毎度御心に御懸被成何よりの御品難有頂戴仕候次ましく小子義も同し御事に相暮居申候道も段〳〵に御影も御座候さりなから色々と相成申候何國に被成御座候而も彼誠斗に御座候信の御心御わすれ不被成は此上は無御座候此度も甚指急き荒〳〵御返事迄まつは筆を留ゟ〳〵めて度〳〵もし

三月十八日

右源二事

左京

植田奥様

尚〳〵御皆々様へよろ敷仰上られ御頼申上候

三六〇 追而申上ら〳〵此たひ金田氏の事段〳〵に御申越しあそはし此人も逗りう少なく殊に娘子の方はやまひと申なから生つきてのやうにおもはれむつか敷御座候しかし御影は一心次第と奉存候庄右衛門殿の方は病に而御坐候まゝ是はなをりやすく方とそんしら〳〵何分にも少の間ゆへ殘多にそんし申候あなた様よりも宜敷やう御申被成可被遣候委敷御事は此人より御聞可被下候甚急先は筆をさし置申上ら〳〵めて度しもし

三月十八日　黒住左京

植田奥様

御返事無事

三四七 彌以世話（斷　絶）居申候乍恐御休意思召可被爲下候しかし道も八方一度に開難有は奉存候得共誠にどふしやう様も無御座此手紙相認候間も無御座今日も途中に而御覽之通大亂筆に而奉伺御機嫌まてに御座候しかし御推覽被爲下（斷　絶）不申迚も御歸り被遊候上に而今之様子御覽入度奉存候呉々も大亂筆御仁免可被爲下候恐惶謹言

六月十六日出　黒住左京

石田鶴右衛門様

三四八 尚々時候御自愛專一に可被遊候以上

〆　略〆御尊免可被下候

瀧川彌右衛門樣

黒住左京

三五二

追而申上候誠に氣毒に御座候は尾上氏御座候生死之事は中々人力
及所には無御座候得共御同人近來之御樣子始は小子宅へ次第〳〵
に遠々敷被致夕斗は折節見へ候得共夫も廻會斗相成夫も當春には
斷に而誠不通に相成それゆへに御不快之樣子もたへて不知素より
御賴もなし外より追々承候得は大病と聞へ候得共心外なから一度
も得見廻不申死去被致候得共悔にも參り不申いたは敷御事に奉存
候死は致方も無御座候得共何を申さうやうもなく致方もなき次第
に奉存候少斗の智か邪魔に相成候哉と奉存候かへす〳〵も殘多事
御座候以上

龜山平六郎樣

黒住左京

三五四

要用無事

一昨日者御光來忝大慶不少奉存候御念被入段々に御初穗御備被成
幾久敷神納仕候且吟次へ御傳聲被遣忝毎年〳〵大御役介御禮難申
盡候所當年者格別之高直に而彌以御高慮に御座候しかし道者御一
躰とそんし候間御をんを御をんとも不存夫故朝暮御繁榮之奉祈候
委敷者期拜眉萬々御禮可申述候謹言

二月廿四日

尙々乍末皆樣へよろ敷御傳聲奉賴候以上

一筆啓上仕候向寒之節御座候處貴家皆々樣御揃被成御堅固に被成
御座候由目出度珍重不過之御事に奉存候隨而野子義も無異に罷在

候乍憚御安意可被下候扨此間者門人参上申莫大成御相談申上候處
早速御承知被成下千万忝仕合に奉存候誠に此度門人中大望之存立
何事も時節到來と奉存候彌以道も開運と奉
存候來月中頃過には參上に而積御物語御禮等可申述候恐惶謹言

十月廿九日　　黒住左京（花押）

那須三平樣

尚々乍末筆御家中樣へ宜敷御傳聲奉賴上候以上

三五五

武田八藏樣　　黒住左京

鳥渡貴家樣御見廻申上度奉存候得共得罷出兼居申候扨々恐入奉候
次第何と申上候樣も無御座殘念千萬奉存候誠にとほうにくれ致方
も無御坐御（虫喰）に重々奉恐入候かく迄に邪のつよき世の中あき

はて居申候如何に被御座候哉御序之節右（虫喰）方宜敷奉願候（虫喰）

十二月二日

三五六

一ふて申遣しより日々不快の天氣にて困入り〳〵今日は御歸り可被
成候いかゝに御入被成候哉此御ふうよろ敷祈念致し置候まゝ一廻
りに御いたゝき被成候私は今晩より四番町草野迄參り明日より尺
所えまいり廿一日歸るつもり御座候夫ゆへあつく祈念いたし候間
歸りまてにはさつぱり御成可被下候荒〳〵めてたくもし

卯月けふ　　隱居より

猶〳〵末廣えも無さたいたし候間宜敷御傳へ可被下候

おいくとの　　黒住左京

（宛名切抜）

一筆啓上仕候甚暑難堪御坐候處彌御機嫌能御出勤被遊候由恐悦至極に奉存候隨而當尊館御二方樣彌以御機嫌よく被成御坐御次に小子義も御同意に相暮居申候乍恐御休意可被爲下候毎度御尋被遣難有奉存候道も近來は大はつしにて誠にはけ敷事に相成重々難有事斗に御坐候しかし餘り俄に大はつしに罷成候間晝夜共少之間も無御坐只今にて百に壹つも届き不申所々氣毒斗に御坐候しかし奇妙成難有事者所々に顯私も承り不思義存候事日々に御坐候只今之道之所御覽に入度奉存候彼是と申内御歸りも段々に近寄候間御直に御覽に入度と奉樂待候今日も只今出かけにて乍亂筆御機嫌能之奉伺候餘書者拜顏にて萬々可申上候恐惶謹言

一筆啓上仕候甚寒之節に御座候所彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐賀隨而當地尊家皆樣御機嫌能被成御座御次に小子御同意に相暮居申候乍惶御尊意安く思召可被下候何かと申候中年内も今少に罷成居申候來春に罷成候得は早日日御歸國も近く相成申候何か御直面にて御咄申上候相樂申上候

一道も近頃は難有事は誠に不思義成事段々御座候先達而も申上候哉と奉存候七日市より參候人かさにてかのちんぼなと落かゝり候位の所一度にて一夜臥候てよく朝をき見候所誠に平生の通りに相成候其後二人程參同病參り同一度つゝにて直り是斗は昔より聞及不申候次第也と難有御事に奉存候是も小子手がらには無御坐みな天照太神樣の御影と奉存候委敷は御直ならては難申上候先は時氣

御見廻旁々如斯御座候恐惶謹言

十二月十六日出

黒住左京

一一二

一筆啓上仕候未餘寒難去御坐候**處益**御機嫌能被遊候由奉恐壽
候隨而當地尊家皆樣御機嫌能被成御座御次に小子も彌世話數相暮
居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候年内には御不快に御入被遊
候得共追々御順快被遊候哉と奉存候御用捨專一に可被遊候毎度申
上候通誠に道者生とうしにて皆心からいきさへ仕候得は限り者無
御坐候かし其處をゝしへ候得共やう生ぬ人者親子兄弟成とも致方
無御坐候願はくは生とうしの**處**を御勤可被爲下候彌以日神御一躰
に相違無御坐候まゝ

略〻御尊免可被爲下候

黒住左京

一一三

一兼々御執行被爲成候間定而御用へ被遊候得共氣に
浮む事少々申上候何事も道を外れ候而は卽座にふちにおち申候道
にさへ居申候得は少も〳〵あふない事無御坐候此所か誠に要用に
御坐候其道は常に御執行被成候處道を離れさへ不仕候はゝ誠に
〳〵生通しに御坐候其道は御承知被成候事なから則
天照皇太神也何につけても難有し〳〵〳〵〳〵〳〵先此度も筆を

限りなき天照神と我心

へたてなければ生とふしなり

たゝ心陽氣に相成邪陰をはなれは生とふしなり長壽を御たもち可被爲下候いつも
急大亂筆荒々如是御坐候恐惶謹言

二月二日出

黒住左京

留候時に一首

あまてらす神の御徳を知人は
月日とともに生とうしなり

誠に〳〵有かたし〳〵恐々謹言

四月十六日

黒住左京

略〆御尊免可被爲下候

一二四

一筆啓上仕候時向暑に相趣候處彌御機嫌能御勤被遊候由毎度御細書被爲下難有奉拝見候隨而尊家皆様御機嫌能被爲成御座御次小子も御同然に罷暮居申候乍恐御尊意安思召可被爲下候いつも御勇敷候而於小子にも難有奉存候小子道も追々餘ほと開口之様に思はれ難有御事に奉存候迚も筆先にては廻り不申候彼是申内早春者立夏に相成追付秋に相成候得は御歸郷被遊候はゝ御直に積る御咄可申上と相樂奉待上候隨分〳〵時氣御厭ひ被遊御勤可被遊候様偏に奉祈候先者度々之尊答迄如是御坐恐惶謹言

五月二日

黒住左京

一二五

先月五日出尊書被爲下難有奉拝見候甚暑難堪御坐候處益御機嫌能御勤被遊恐悦至極に奉存候隨而當地尊家皆様御機嫌能被遊御坐御次に小子皆々御同意に相暮し居申候乍恐御休意可被爲下候一尊所様にも先々月中頃時分より御不快に被成御座候所追追御順快被遊尊書被成下候時分には大方御平生被成御座候由最早さつぱり御快氣被遊候哉と奉祈候何か日々御執行之思召被仰下御信仰御厚事奉感心候尤三通り之内はらを不立と　事は御勤り安く跡二つ

が六か敷御様子被仰下至極御尤御事に奉存候夫に付先年野子一首
仕候事御座候申上候かも相知れ不申候得とも何とやら左様成所へ
引合候間申上候其歌に

身も我も心もすてゝ天つちの
たつたひとつのまことはかりに

此心はしれた事には御座候得ともまことの本躰は　天照大神の御
心也其有かたき事を一筋におもひ萬事御任申上是にて何事も氣遣
いなしと疑ひをはなれ候得は直に御かげは目の前に顯れ可申候皆
人々疑なしとは思ひ候得とも苦に成おく病おこり候も皆疑也例の
誠は九事にてすくに一心一躰也かやう申上候も如何と奉存候得共
尊君様も小子始而參上仕候時申上候處を少にても御疑被遊候はゝ
乍恐只今者此世には被成御座候事難斗奉存候左様候得は彌以　天
照太神へ御任遊し萬事少も御氣遣なしと御定可被遊候此心か今の
歌の心に御座候直に其心か祓也しかし御文面の處重々感心奉り候
得共筆のやくに申上候猶委敷は追々可申上候恐惶謹言

七月二日

黒住左京（花押）

二八

一筆啓上仕候先以薄暑に相趣候得共先以其御地
尊君様益御機嫌能被成御出務候由珍重不斜御事奉存候隨而當地尊
家皆様御機嫌能御次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐御安意思
召可被爲下候先道も折合居申候申上候迄も無御座候得共何事も
〳〵御任可被遊候皆天命に御座候間難有より外者無御座と奉存候
幾重も〳〵分別者少も少も入用に無是物と相見へ候天道まかせ程

世に安心成事は無御座候心安く暮し候こそ高天原と奉存候其原こ
そ神はましますと奉存候心くもる時はまよひ也迷ひの中には鬼も
蛇も居申候誠に恐敷者迷ひ也心明成時は則天照大神我一心にあら
はれ給ひて運をそへ給ふ事疑ひ有へからす有かたし〳〵〳〵時に
一首

有かたやあら面白や〳〵

こゝろの雲のはれ渡る時

此手紙半よりかうしやくの心にて相調へ申上候其御心得にて御覧
可被爲下候恐惶謹言

四月十三日調

黒住左京
（朱印）

一一九

一筆啓上仕候寒氣彌増に御座候得共益御機嫌能被成御座候由大悦
至極に奉存候隨而當地尊家皆様御機けんよく被成御坐奉珍重候御
次に小子義も近頃者彌世話敷夫故御機嫌も得不奉伺大に御無沙汰
斗申上候毎度御念書之趣誠に難有奉存候夫のみ日々奉祈上候何か
と申中年内も今少に相成又來春に相成候はゝ直に御歸郷も近寄申
候しかし日日之難有にて御おほれ不被遊候様に可被遊候毎度〳〵
申上候通り其端〳〵を天命と思召御樂み被遊候得は直に御歸國に
罷成候近頃者小子もけしからぬ事に相成候得共難有と面白にて相
暮候得は少も〳〵くつたくは不仕候餘り御無音故誠に荒々如是御
坐恐惶謹言

十一月十六日出

黒住左京

一二二　一筆啓上仕候時分柄秋冷相催候處彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐賀候隨而當地尊家皆樣御機嫌よく被成御坐恐悦に奉存候御次に小子皆々御同意に相暮居申候此段御安意可被下候毎度尊書被遣彌以御勇々敷尊書誠に奉感拜候近頃者道も日々榮に相成難有御事に御坐候最早たとへはつゝみのくつれかゝり候樣に罷成誠に〳〵面白事斗に御坐候しかし姿之上にて申候得は手も足も出不申候彌心は治り候得は難有のみにて日をゝくり居申候いつも申上候通り道は日々面白暮し候得は面白斗也難有のみくらせは難有斗也たゝ心の向方に顯候まゝ何事もよきをとり惡敷をすて候得はよき事斗に相成候時に一首

よきことはつとめてもみな取給へ

惡敗事をはらひ給へよ

是皆心の祓也御笑〳〵先は荒々筆を留候甚急用事斗早々恐惶謹言

（破損）月二日出

（宛名切抜）

黒仕左京（花押）

一二三　一筆啓上仕候時分柄寒冷彌增に御座候處益御機嫌能被爲成御勤奉恐賀候隨而當地　皆樣御機けんよく被成御坐御次に小子義も無異罷暮居申候乍恐尊意安く思召可被爲下候

一道も近頃者益榮に相成誠に難有事所々に顯れ彌世話敷罷成時と致し候ては是ては先か如何成事かとくつたく仕候しかし彌以丈夫には罷成難有御事に奉存候しかし是は俗情時一首

我といふ其一もつを捨ぬれは

ひろき世界は我身成るらん

御一笑直に御火中可被下候誠に〳〵日々せかまれ候故心外に御無音申上候先月十一日之尊書難有近來者益御勇敷御勤被遊難有日々天拜御禮申上候何かと申内早御歸國も日々近寄只今かうしやく御聞に入度奉存候此手紙も會先にて鳥渡相認大亂筆たゝ一ふでに御座候御推覽可被爲下候恐々謹言

霜月二日出

二四

一筆啓上仕候先以寒冷之節に御座候得共其御地　尊君樣彌御機嫌能被爲成御出務候由恐悦至極に奉存候隨而當地尊家御両所樣御初小子皆々御同意に相暮居申候乍恐御休意思召可被爲下候兼々申上置候通道は御一心之一つに御座候何事も〳〵御生し被成候はゝみな生物と相成候善ことは不及申惡敷にても取成にて皆善事と相成候申上候迄も無御座候得共御いかし被遊可被下候皆是　天照大神の御道に御座候誠に目前に慥成事段々見候事御座候幾重も幾重も御いかし可被下候爲指御事も無御座候得共先は時氣御見舞旁々如斯御座候恐惶謹言

霜月二日

黒住左京

二五

追啓申上候此書狀相認上置候所へ則七月十六日出尊書相達難有奉拜見候益御機嫌能御勤被遊候由奉恐賀候且御みくじ事御申越し被遊御文面之趣誠に奉感心候左樣無御坐候ては依怙に罷成候間思召寄重々奉感心候直に於神前に宜敷心願厚仕吉凶を其まゝ相印置候間御覽之上御斗可被遊候しかし御細書之内に神闕宜敷御座候はゝ

御役に御替被成ても御申立被遊候由是も餘りにて却而御我意に落候哉と奉存候一通り一二を御分被遊御申上被遊跡は御上次第に被遊候方是も天命と奉存候午去此事は御考之上よき程に可被遊候御隔なき故心にうかみ候まゝ申上候先は尊荅迄荒々如是御座候謹言

二日出

二二六

一筆啓上仕候未殘暑難去益烈敷御座候處彌御機嫌能被成御出務候由奉恐賀候隨而當地尊家御二方樣とも御機嫌能誠に御六間敷御暮被爲成奉恐悦候次に小子皆々御同意に相暮居申候此段御安意可被爲下候且小子も彌以道大開にて誠會毎にわくことく多人中にて益難有いよ〳〵面白く日日をくり居申候前度申上候通誠に道者

京

左

彌

天照太神に候得はたゝ難有面白くと日々相暮候得は是ほと世に德は外に無御座候夫を色々と種々之分別を出し候間我と苦みを出し難義仕候左候得は道は至而勤安き物にて御座候たゝ何事も天へ御任せ今如何程成事出來候共此方に惡心さへ無御座候はゝ惡きと見へ候も跡は難有事に相成候もの也爰相考へ候得は少も〳〵苦に成と申候事は少も〳〵無御座候くどうも〳〵難有にて目をくり候得は何時迄もいきとうし也有かたし〳〵時に一首

何時までもいきとうしぞと思ひなは

月日のたつも面白きかな

御一笑〳〵

しかし左樣成心に相成候得は大に安心に御座候毎度世話敷先は荒々筆を留候恐惶謹言

八月十六日

黒住左京

二二八

一筆啓上仕候甚寒之節御座候處彌其御地　尊君樣御機嫌能被爲成御出務候由奉恐壽候隨而當地尊家御初小子皆々御同意に相暮居申候此段尊意安く思召可被爲下候乍末筆先達而も御念書難有拜見仕誠に〳〵奉感心候萬事御高運之所此上もなき御事に奉存候彌御たるみなく御任せ可被遊候何事も天命より外に少も〳〵無御座候間しれた事申上候遠き事御さがし不被成御目のまへの有かたき事御ゆるし被成間敷候猶委敷は追々申上度候先は時氣御見廻如斯御座候恐惶謹言

黒住左京

二二九

十二月十六日出

一筆啓上仕候時分柄冷氣彌增に御座候處益御機嫌能御務被爲遊候由恐喜不少御事に奉存候隨而當地御尊家皆樣御機嫌よく御次に小子御同意相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候御地者如何に御座候哉當地者天氣快晴にて日々暖にて誠に暮能次第にて大に甘居申候小子義も日々世話敷面白く難有相暮申上候しかし心配を仕る氣に相成候得は心遣ひやむ事無御座と奉存候得共よき事は難有樂み惡敷事有時は執行と奉存候得は何事も一切執行をもるる事無御座候其餘者萬事難有はかり也何事も皆天命を樂時はもつたひなくも

天照大神樣のはら也一々申上す候得共近頃誠に有かたき事所々に

顯自然道の開かと奉存候委敷者來春御歸鄕之上にてつもる御咄し可申上と奉樂待候先者荒々如斯御座候恐惶謹言

十月十六日

黒　住　左　京
（化押）

一三二　向暑之時分に御座候處先以其御地　尊君樣益御機嫌能御出務被成候由目出度御事に奉存上候隨而當地御兩尊樣御機嫌能被成御坐目出度奉存候御次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐御安意可被爲下候且何かと申內御歸國次第に近寄奉待樂候當年は御歸之時分に御參宮御望被遊度よし此間神圖を奉伺候處さして御故障も無御坐候得共同は此度は御延引被遊候而明後年御歸に被成候方宜敷と奉存候夫共是非共御參宮被遊度思召候はゝ秋に相成今一度奉伺又々申上候兎角何事も天に御任被遊候方宜敷と奉存候別而爲指御事も無御坐候得共先は時氣御見舞旁々如斯御座候恐惶謹言

五月十六日出

黒　住　左　京

一三五　一筆啓上仕候先以未殘暑甚敷御座候處益御機嫌よく被成御出務候由珍重不斜御事奉存候隨而當地　尊家皆樣御機嫌よく被成御座次に小子皆々御同意に相暮居申候乍憚御安意思召可被下候誠に先達而者御內間合之事に御心配被遊候由御內々承り候しかし申上候迄も無御座候得共そこが御執行の大一と奉存候何事もさわらぬやうに被成候所誠に一大事と奉存候先御文通共者不相替被成候方か宜敷哉に奉存候幾重も〳〵御はら立は御無用と奉存候善惡者人か知り申候必〳〵御心得可被遊候邪人者當時致し方のなき物ゝ奉存候先は荒〳〵如斯御座候恐惶謹言

七月十六日出

（切　抜）　様

尙〳〵時候御あとひ御勤可被遊候以上

左京

一三七

先月二日出之尊札相達難有奉拝見候益御機嫌能被成御勤候由奉恐
壽候随而當地尊家御二方様御初小子方皆々御同意に相暮居申候乍
恐御尊意安く思召可被爲下候御尊書之趣甚奉感心候何事も天命に
御任被遊候得は自然と御ほとけ被成候由重々奉感心候人と申物兎
角少之事に心かゝり其所より何つ之間にか元の道を忘れ候事甚恐
敷事に御座候申上る迄も無御座候得とも萬事其元を御わすれ被成
間敷候元有て枝葉にて御座候小子道も當年者何とやら開け口之様
に御座候委敷者追々申上候先は尊答時候御見廻旁々如斯御座候恐

惶謹言

三月二日

黒住左京（花押）

一三八

一筆啓上仕候時分柄秋冷相催候所彌御機嫌能御勤被遊候由恐悦至
極奉存候随而當地尊家皆様御機けんよく被成御座御次に小子皆々
同し御事に相暮居申候乍恐御休意思召可被爲下候毎度御細書難有
奉拝見候誠に近頃者益御勇敷御様子於小子も難有奉存候
一道はかね〳〵申上候通り只一つにきはまり候間少も少も六ヶ敷
事は無御座候元なき所より出たる身なれは心の元はみなき所よ
り参り候まゝ常々其無處を養ふこそ天照大神の御玉をやしのう所
也此所勤り候得は死る物なし此養ふ所より外に一大事はなし幾重
も〳〵大事に致し度は姿なき心也時に一首

姿なき心一つをやしのうは
かしこき人のしゆきやう成らん

しれた事斗に御座候得共常々此所を能御執行可被成候近頃者小子も誠に世話敷只一筆認候間も無御座候くらいに御座候先は荒々大亂筆御推覧可被成下候恐惶謹言

八月廿日　相認

黒住左京

一三九　改年之御慶目出度申納候先以尊君様御機嫌能御越年被遊候由珍重不斜御事に奉存候随而當地尊家御二方様御機嫌よく御越年被遊候御次に小子方皆々御同意に嘉年仕候乍恐御尊意安く思召可被爲下候且去暮も尊書被爲下難爲有拝見仕候毎度〳〵御勇敷御尊書被遣格別難有奉存候

一道も格別廣りも不申候得とも誠に一心に受る人者其端にて病とも平愈仕候事近頃は追々出來候しかし何事も不殘天命と奉存候尊命通御任被遊候より外無御座候委敷春永可申上候恐惶謹言

正月三日　　黒住左京

一四〇　一筆啓上仕候未餘寒嚴敷御座候所彌御機嫌能被成御座候由奉恐賀候随而當地尊家御皆様御機けんよく御次に小子皆々も御同意に相暮居申候乍恐御安意可被爲下候先便にも何か御心配筋之事御申越被遊奉承知候厚く奉心願候兼申上候通誠一つにして万事天命に御任被遊候得は少も御心痛被遊候事無御座候其上小子に御噂被遊候得は小子より　天照大神様へ奉申上候時は彌御安心可被遊候近頃者道も段々と開け此節は晝夜せがまれ時としては困り候得は迚

も身一つにて候間成たけにて致方無御座候何かと申上候内御歸國
も今少に相成候間積る御咄申上度と奉樂候恐惶謹言

二月十五日　　黒住左京（花押）

一四二　御老人樣御病氣御祈念之事被仰遣奉畏候早々相務候處御神告宜敷
御座候間御安心可被成候且又御内々被仰遣候義拙考には何卒御見
合被成候方道に叶候やふ奉存候兼々御咄申上候通り一さいおもは
くと申物は身の爲にして心の爲にはならぬもの也たゝ御心をよろ
しく御養ひなされ候事御肝要に奉存候
我われとおもふ我身は天のわれ
我ものとては一物もなし
にて身も心に隨ふものとなしたゝ已れの氣に隨わさる樣に一切天
のものに致し置時には少しも我なし左候へは我なきゆへに天のも
の也天のものなれは天照皇太神は一切萬物を生じ給ふ大御神ゆへ天地
同體なればがの天照皇太神と同魂同たいなり天照太神と同こん
のあいた一切生し一切何事も成就せすといふことなしに御座候間
只何事も日丸樣に御任被成候事而已奉祈候
大御神の御歌にも
我こゝろ磨こゝろの有人は
惡事さいなんはらひ除けん
天のみこゝろをよく〳〵考給ふてもかんかへ給ふへし何樣いそき
何も御目に掛りよろつ御話しと申上殘し候穴賢

十二月十七日

尙〳〵近々御來臨被遣度又私も參上仕候

黑　住

一四三　一筆啓上仕候先以冷氣彌增に御座候處彌御機嫌能御出勤被爲遊候由恐悅至極に奉存候當所尊家皆々樣御機けんよく御次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候誠に毎度御念書被爲下難有奉拜見候於小子も難有奉存候近頃者道も彌廣まり難有事者段々御座候得ども晝夜せかまれ候には困り居申候しかし何事も御かけと思へは勤り可申者也おもへは何事も皆天命と奉存候得は間に合申者也自然の天命なれは日月晝夜照し給ふも自然の道なれは乍恐御つかれもなく夫をおもへは世に天命ほと(斷絕)

一四四　一筆啓上仕候甚暑之時分に御座候處先以　殿樣益御機嫌能被爲遊御座候哉と奉恐悅候御次に貴所樣御揃被成御壯堅御勤被成候由珍重不過之御事に奉存候隨而小子義も彌近來者發し只今之樣子にて者追々者何國迄ゑ廣り候やら相知れ不申候北國筋とも誠に一圓に相成近頃者人之病者元より草木酒醬油井水なと先不殘と申位に御座候皆神水の德其上奇妙事者上て數るに(斷絕)

一四五　一筆啓上仕候未餘寒難去御坐候得共其御地　尊君樣益御機嫌能御出務被爲成候由恐悅に奉存候隨而當地皆樣御機けんよく被爲成御坐候此段御安意思召可被成候御次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐御休意可被爲下候先道も折合居申候申上候迄も無御坐候得共天地御國恩を御忘被遊間敷候道と申もたる事を知るより外は無御

署〆御尊免可被下候

座と奉存候則忘ぬと申も難有をゆるさぬ所はかりそんし奉候しかし有かたいも常に成候得は夫程になきものと見へ候間幾重も〳〵御ゆたん被成間敷候かく申候我〳〵忘れかちに御座候古歌にも

（歟絶）

一四六 此手紙相調當月二日出御細書相達し奉拜見候御文面之趣何事も〳〵御尤に奉存候并御道歌御心得の所至極之思召奉感心候仰之通に善悪共に天命〳〵と御定め自然を御待被遊候より外は無御座と奉存候哉〳〵もてん命次第に被遊候あなし〳〵

一四七（前文切取）

にて居申候夫故何かの様子も罷出御咄可申上積之處大延仕候御屋敷様にも女郎様御不快之御様子是も如何に被成御座候哉宜敷御見廻被申上可被下候しかし小子義も最早宜誠者難有者にて又天より執行被仰付候事にて彌道之元入に御座候病中なから此間のかうしやく古今之出來に御座候委敷者拜顔にて萬々御咄可申哭々も御心配ところには無御坐御歡可被下候以上

二月廿七日

一四八 道なくは君の御家も君も無御座候ゆへみちに御まかせ被成候はゝ天命にて御安心の所は自然と出來申也私何ほとのはたらき致とも天にかなない不申ばいたし方無御坐夫ゆ　君の御心大事なり夢〳〵何ことも天命を御そむき被成まじく自然の御徳そなはるやう被成下され候かやう申候と君をうたかい候やうにそんじられ候得ともかやう成時は魔のさす物也道に入給ふ人は御一生の御事斗に非す

天地有んかきりの御事也何ことも〳〵少も御ごうし被成間敷候委敷は御直に追〳〵御はなし申上候先はあら〳〵筆をとめ〳〵

一四九 嘸々御用多に御勤被遊候哉奉遠察候随而當地　尊家皆様御機嫌よく被遊御坐候御次に小子みな〳〵御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候

一道者彌繁榮にて誠に晝夜被頼付候而時としては大に迷惑仕候しかし例のかの我といふものをはなれ無念より相勤候得は難有事はつとまらぬと申事は無御座候夫をおもへは世界の人々道といふ名に迷ひ明暮道に迷ふ人其數しれす誠に大道者其まゝ成處が大道也おもへは難有事（斷絕）

一五〇 尚々先達而者何か御心配被遊候趣承り宜敷祈念仕指上候定而御落手被遊候哉と奉存候何事も天命に御任せ被遊候得は少も〳〵御氣遣者無御坐候いつも可笑御文面を指上候御笑見可被爲下候

一五一 先達も御目つき御歌御越し被遣候甚感心仕候此上は尊顔ならては申上かたく御たとへ至極面白き御事御座候しかし御歌に

ありなしの心を捨て大空の
　色なきを我心ともかな

乍憚餘り無か過は不仕や夫につき

我はたゝわれ無道を我たつねそたのしき
　われ無に行我そたのしき

此かたち有中は此くらいの處か宜敷と奉存候尤死に趣く時の歌に

は至極よろ敷やと奉存候委敷は追付御歸を奉待萬端可申述候以上

一五四　此書狀相調候所へ三日出尊書則尊家にて拜見奉り候彌御機けんよく御越年被遊候由奉珍壽候然は御執行口之義被仰御尤に奉存候しかし御いれの處大一の御執行御座候御出精被成はなさるほと先は遠く成物に御座候御おくひよふの所御尤に奉存候是もいつ迄も最早おくひよふなくとおほしめす事は無が宜敷御座候しかし兼而申上候通り生物は御心に御座候其御心は有かたくも天照太神樣に御座候間誠にさつばり御まかせ被成候はゝ御おくひよふは少も〳〵出不申候此所より外に道は無御座候甚急き亂筆御尊免可被下候書外追〳〵可申上候以上

十四日晝過

則尊家樣にて
（御名切抜）調

一五五　追而申上候

此間まん心の門人を段々にしめし候處感心いたし神文書改めほつ句一首

立寄て愛きゝぬ梅の宿

道執行の心を

登れともまたおほろなりみねの月

といたし小子に道歌一首所望いたしもんもふの小子ゆへとうわく仕候しかし心斗かく侍る

闇よりくらきに入よ人心

月は誠の空にこそすめ

といたし候くらきと申心は自身のことゝ申心にて誠に少にても我

に明り入候とそんし候得は大成まん心也いよ〳〵我ちへをすてゝ
信心をいたし候得は其中に誠に有かたき夜の明たることくのことく
ありいよ〳〵我ちへをすつるこそ道の道也よく〳〵御考へ可被成
候めて度〳〵

一五六 追啓申上候先日も口釋にいたし候今日は貴賤老若之わけなく此道
におゐてはいつまてもいきとうしのところかうしやく仕候と子供
までに聞る候やうとけ今のかうしやく御聞に入度何を書かう様も
無御座候得共其生とうしは彌心はかりいき物と申のうたかいまこ
とにはなれみれはかの　天照大神斗に相成たゝかうはつも生たい
と申事をはなれ望みをはなれうたかひをはなれみれは道は天の道
也我とく道に非す天の道なら天にまかせ見れはすくに我なし我な
けれは天の心斗也其天の心か我道也其道か生物也此生物みな無也
其無こそ一大事也佛にも本來無一物といへり我丸でなくなれは天
地のむすびし心の生物はしめて目さめ夢の覺ることく也此文は先
日とき候事を書かうとそんし書きかけ候内にうかみ候まゝすくに
此手紙はかうしやく也于誠無に入て調候まゝ何とそ〳〵生かして
御取被成可爲下候以上

一五八 甚寒之節彌御障も無御座目出度奉存候然者誠に先日者御苦勞忝奉
存候然共甚不つかうにて御氣毒に御座候御序も御座候はゝ先方へ
宜敷御斷奉賴候且神龕を伺ひ候處宜からす候間此段心外に御斷申
上候何事も神明次第に可仕候間末時至り不申と奉存候委敷は御面
上之時萬々可申述候不具

極月九日

尙〳〵御老人樣へ宜敷御傳聲奉賴上候

三六二　君の御心さし相考へ候得はまことに御いたはしく又我身をかほとまておほしめすこと何と申さふようなき有かたく御嬉敷そんし上り〳〵しかし何ことも天命にて御座候まま私におゐては君の御ゆく末宜敷事はかり祈り〳〵少も〳〵私にすまぬなどと思召下され候ては恐入申上り〳〵たた親樣か直に御形の天命に御座候まゝ御そむきは相成間敷さりなからかやうに相成もみな天めいに御座候まゝまた末はいかやう成御ことにて御心のまゝに相成候も相しれ不申候とかく命がものたね也何れの道にも御心を御いため下されましく候夫のみ〳〵願ひ上り〳〵是もみな天地のためと思召被遣候委敷

は御けんのふしと申殘しり〳〵めて度しもし

私より

君へ

又々申上候かやう申上候ても形のわさは少も無御座たゝ心斗の御事にて世不思義成御務りに御坐候又々しもし

三六三　〆

切〆御尊免可被下候

黑住左京（無異）

（宛名切抜）

先月廿一日出尊札相達難有奉拜見候甚寒之節に御座候處彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐壽候隨而御屋敷御兩所樣御機嫌よく被成御坐御次小子義御同意に相暮居申候乍惶御尊意安く思召可被下候

一何か御心配筋之御事夫々天に御任被遊候處一つ〳〵能樣に相濟

被成候よし扨々奇妙成御事奉存上候萬事其所に被成御座候得は悪敷事は少も無御座候今日者則尊家様へ參上に而一寸尊答迄大亂筆如斯御座恐惶謹言

十二月四日

黒住左京

（宛名切抜）

尚々時候御用捨專一可被遊候

三四六 一切　天照皇太神に限り我物と申者少も無御座候其太神の御心か我本心と疑ひはなれ候得は有かたふて〳〵成ませぬ時に一首

天てらす神と人とはへたてなく
直に神そとおもふ嬉しさ

御笑草かの少も考へは無御坐候御他見は御斷たゝ無念より相認候

文に御座候御覽被遣も御をかしく思召と奉存候得とも少活物を加へ申上候荒々以上

五月十六日

黒住左京

三六五 一筆啓上仕候未殘暑甚敷御座候處彌御機嫌能御勤被遊候由奉恐賀候隨而御當地　尊家皆様御機嫌能被成御座候御次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候其御地者如何に當地は始は冷敷追々殘暑相成次第〳〵に誠に烈敷相成夫故か所々病人多にて中には段々にあやまちも多く御座候しかし道しんこうの人には壹人も無御坐候難有御事に奉存候道も日ましに相成此上は如何に相成候哉先は相知れ不申候乍去何事も天命次第と難有のみにて日々をゝくり居申候日月世界を御廻り被成候而も自然なら御

つかれも不被遊候間天理なら勤り候哉と奉存候間彌難有に而日々を暮し居申候乍末此度之御話者御安心可被遊候御内は至而宜敷誠に御六間敷御事にて於小子も難有奉存上候左樣無御座候而は相成不申候道はたた一心のみに御座候其一心さへ御一躰と仕候得は少も氣遣ひは無御座候誠に天地は日月にて生物と相成候間彌疑をはなれ一心をすへ候得は氣遣ひ無御座候返す〳〵も御一心を御すへ可被遊候先は荒〳〵筆留候恐惶謹言

七月廿八日認

黒住左京

略〆御尊免可被下候

三六六

二日出之尊書難有奉拜見候先以其御地　尊君樣益御機嫌能被爲成御出務候由珍重不斜御事奉存候随而當地尊家皆樣御機嫌能被成御座次に小子皆々御同意に居申候右御連士中無別條各出精被成候且御文面之趣甚感心仕候誠に思召之處此上も無御座結構成御事に而御座候彌御執行第一と奉存候何事も皆天命難有のみに被遊候より外に道は無御座候當年所々へ　大神宮の御祓ふり誠に〳〵難有事何ともかとも難申盡候定而御聞も被遊候やと奉存候先は荒〳〵如斯御座候恐惶謹言

閏三月十六日出

左京

略〆御尊免可被下候

三六七

先月十一日出之尊札被爲遣忝奉拜見候先達而者少々御不快に被成御座候由御難義と奉存候しかし早速御快氣被成候由目出度御事に奉存候隨而當地尊家皆樣御機嫌能被成御座次に小子無異に相暮居

申候乍惶御尊意易く思召可被爲下候誠に御一心之所奉感心候當年者所々へ御祓ふり候由誠に難有御事に奉存候此節往來筋は一面にかさ斗と申位成る御事に御座候定而御聞被遊候哉と奉存候當年こそ沙汰より大也と承り候兼而小子共目付　天照大神御影斗と奉存候所少も〳〵相違無御座候間無此上も難有奉存候申上度御事は山々御座候得共筆紙申盡先は荒〳〵如斯御座候恐惶謹言

四月二日出

左　京

三六八

夜前者御光臨被下忝大慶至極に奉存候然者御約束申上置候御頂戴物今朝中仙道(切　抜)申來候夫故心外に御斷申上候しかし此日供者加樣之時相用へ可申と奉存候難有御日供に御座候間則神符と思召御頂戴可被成候御かけ之程者御内用に御座候書外拜顏に而萬々可申上候以上

七月十七日

三六九

追而申上候此手紙相調へ候所へ十五日出の　尊札被遣難有奉拜見候扱〳〵奉感心候其内別して中にも丸ひ世かいと遠くとも一ツ心との二首誠に奉感心候近頃は御心大に御出精被成有かたく奉存候此間さる人の心を察して一首仕候

はらへども又はらへとも〳〵

油斷の成ぬかゝる雲きり

と仕候しかし夫斗に而は(破　損)よくは御座候(以下斷絕)

三七〇

彌御壯健に被成御座目出度奉存候先達而御被難有奉存候其後御宿所へ御見廻申上度

奉存候所甚世話敷御無音申上候其節ちらと御噂申上置候御
日供料拾貳匁夛是は當家中山田市右衛門と申物頭役を相勤候人私門
人に御座候此者下女子年此者甚相勝れ不申候節則　御雨社様へ小
子心願仕候所御影に而平癒仕候右御禮猶又彌息災之奉願上候
一日供料（以下斷絕）

三七一　一筆啓上仕候時分柄暑に相趣候處先以其御地貴家皆々樣被成御揃
御壯剛に被成候由珍重不過之御事に奉存候誠に春方は參上申段々
に御取持に相成忝次第奉存候隨而小子義も彌以世話敷相成於只今
迄とは又百倍に相成手も足も合不申候尤門人も段々相まし候得共
一向引たり不申候しかし此度之御文面に而者誠に日本第一之御（以
下斷絕）

三七二　追而申上候會日之人々誠にはくことく相增候其上會席之增事
一御隅屋敷に御内所に而相立御内所付不殘御家内中
一石黑へ市之丞より御咄に而誠に感心被致則御預り屋敷に而（以下
斷絕）

三七三　心こゝにあらされは見れとも見へす聞ともきこへすと申こと御座
候處尤成こと也君は不思義成御縁にて三千世界に叶ぬ命を又外に
なき道にたすけられ給ひなから御心上につき候ゆへ先へ廻り段々
に申上候をかの上きゝに被成私にかくしさへ被成ばよきと思召其
元は丸忘れに被成今ては誠に致方なき次第也もつたひなくも　天
照大神樣の御道をけかし給ふ事私心には君は御うらみ不申候皆悪
魔のなすことゝおもひ君は彌御いたはしくそんしらぬゆへ中〳〵

君をすつる心ていは少も〳〵無御座候哉〳〵も御直ならては申盡しかたく先はあら〳〵めて度〳〵

三七四　今日は如何に御入らせ遊し被成候哉夫のみ祈り上ら〳〵如何被成候哉と案し候得は心たまり不申候得ともこゝが天命とそんし直にまかせ奉り御いのり申上ら〳〵天命とは申なから誠にこゝんにならひなき次第に御座候得は何事も天めいに御まかせ被遊候て御ふさきなきやう御頼申上ら〳〵まつはあら〳〵めて度かしく

（左の文は右の文の中に割書にせられたるもの也）

かへす〳〵も何ことも〳〵天命に御かけばんし御まかせ遊はし被成候はゝ天道様かよきやうになされ下され候是を有かたひとおもふを聖人と申也君もせいじんに御成下され候委敷は御直に申上ら〳〵また〳〵かしく

三七五　先刻兄様の御夢は誠に有かたき御事なりふしは我身なりそれを天下へひろむるは君なり是末廣にして我心をやしなひ給ふもとなり有かたし〳〵今夕委敷は申上ら〳〵

めて度かしく

三七八　一筆啓上仕候未餘寒嚴敷御座候處尊君樣御機嫌能被成御座候由奉恐壽候隨而御屋敷御兩方樣彌御機げんよく被爲在御次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候

一兼々申上置候通誠に道者心一つに而御座候活る時いき死る時者必死何事もかつて次第に相違無御座候難有事段段御座候而どうや

ら道も開口之様に御座候而大に力を得申候吳々も

日の神御一躰之處御ゆるし被成間敷其所を偏に奉賴上候迚も筆に

而難申上候追々尊顔之節萬々可申上候恐惶謹言

二月二日　　黒住左京

三七九

略〆御尊免可被下候　先濟　　黒住左京（切拔貼付）

一筆啓上仕候先以時分柄向寒彌增に御座候處彌御機嫌能被成御勤

候哉と奉恐壽候隨而尊家皆樣御次に小子方皆々御同意に相暮居申

候乍恐此段御安意可被爲下候兼々申上候通り道者何事も御一心壹

つに而御座候其御一心と申候か兼而申上候通り天地に一つ之御一

心に御座候間其所へ御任被遊候はゝ少も〳〵御氣遣無御座候幾重

も其處を御忘被遊間敷今日者甚世話敷誠に寸志斗申上候恐惶謹言

黒住

十一月十六日

三八〇

追而申上候此手紙相認居申處へ先月十六日出尊書相達し難有奉拜

見候彌御機嫌能被遊御勤候由奉恐壽候且　御母君樣之御樣子御姉

樣よりも委敷御申上被成就右御心配被爲成候所御尤千萬に奉存上

候しかし左樣程之御事とは小子共は決而存不申候乍去人之命者相

知れ者不申候得共中々左樣成御事とは存上不申候御氣遣被遊間敷

候

一爲御初穗金百疋御備被遊慥に神納仕候御祈禱の儀は能樣取斗指

上可申候少も御心配被遊間敷候御文面之處に而者御心配者至極御

尤千萬に奉存候たとへ御文面之通に御座候而も右御孝心天道に相

叶可申候間彌以御心配被遊間敷候委敷者追便に申上候先は尊答御

受取迄如此御座候恐惶謹言

十月廿八日書

三八一 一二三と御座候を御催し御座候はゞ一と申を御頂戴被成彌はけ敷所で二と御座候を御戴き可被成候其次三と申は御安産後にても宜敷内にでも不苦候尤十五印と御座候は朔日より一粒つゝ毎朝頂戴可被成候以上

藤原宗忠（切抜貼付）

三八二 御さつぱり被爲成候而乍恐（被　損）此義は少も〳〵御心配被成間敷候先達而之御文面に被仰聞何か大に御心配被爲成候所しかし苦を以却而御樂被成候樣至極（以下斷絕）

三八三 病とても心を（中　斷）

天照大神樣と彌御一躰と存心程は其場よりさつぱりと平癒と相定

候得は其時よ（以下斷絕）

黒住左京（切抜表裝）

五〇二 先月十六日出相達拜見仕候未殘暑甚敷御座候得共尊所樣彌御機嫌能被成御出務候由珍重不少御事に奉存候隨而尊家皆樣小子皆々御同意に相暮居申候此段尊意易く思召可被下候誠に道者何事も天に任心をみち候處則道と奉存候少々に而もゆるみ候と色々難義來と奉存候申上る迄も無御坐候共御油斷被成間敷候先は尊答迄如斯御坐候恐惶謹言

七月二日出

黒住左京

第三　雜集

文政七年申三月十二日出立

伊勢參宮心覺

黒住宗忠

一十二日朝七ツ半に出立　四ツ半舟橋にて休足夫より九ツ時いんべにて休足同八ツ時片上（宿屋疊屋彌一右衛門、此夜大雨ふる）書旅籠夫より三石へ越度そんし候處折節橋左近樣御留主故宿なし其まま留り　十三日夫より船に乗九ツ前出す八ツ前中戸と申所へゆく西風少出る天氣中晴なり夫よりまほにて大たふよりはしる其行事飛かことく歌に

足いらすとふかことくに行道は

爰そ高天の原の道なり

夫よりけんじという處に行風またおち疊の上のことく爰には山

の間に數々小き舟をつなき山の上に高く木にて火のみのやう成事を作り其中に二三人居る也是はばらを取見合也又夫より風大分出面白事限なし八ツ前より天氣はれいよ〳〵舟はしる也同時過には赤穗の沖へゆく也同七ツ前に室へつき爰にてかゝり暮過より舟を出す彌風出おひてよく凡九ツ前には明石爰に懸り夜あけて○十四日五ツ前に舟をうけ少つゝはしる爰そ名にあふ舞子の濱なり同四ツ時分に一の谷へつく爰より風北東に成舟ゆかす四五人あかり各ひく夫よりひやうごへ九ツ過に着爰にて一日見合風東かせにて其よ舟に留りよく○十五日朝上り夫よりあまか崎まてあゆみ折節同道久之介はしかにて甚こまり馬に乗り西の宮よりあまかさきまでのらせ爰より舟にのり大坂へ夜五ツに着

十六日雨天にて稲荷へ參折人形芝居面白事候

十七日雛波新地見世物數〳〵まことに目をおどろかす事限なし言語に難述候

其よ雨大にふり○明十六日先爰にて見合同人はしかまことに盛りと見へ候先爰にて一兩日見合よく○十七日朝天き惡敷晝より空晴夫より彼はしか人も大に快氣まことにふしきに難有ほどまたざまという處へ行同芝居猶〳〵面白事候暮前に歸病人彌よろ敷人壹人彼病人え付置同道一人直に夜舟に乘天氣いよ〳〵よし其よ甚寒し誠に平生の難有思ひしられ候○明十八日の五ツ過に伏見へつくすしやと申舟宿にてしたくいたし人足を借伏見の稻荷へ參則正一位勸請願意賴置直に吉田へ參九ツ過也○明十九日今日御取次に合夫より町内へ見物に出る先吉田日本六十餘州御神を勸請有し靈地拜し夫より眞如堂黑谷へ參り歸り廿日にしんかんにんの宮參夫より大谷宮へ參り知恩院參り祇園へ參り夫よ

り清水参り夫より四條方より歸りよく廿一日百万へんへ参夫より下加茂参夫より同上加茂今宮大徳寺夫より北野平野金閣寺夫より壬生東寺夫より六角堂西本願寺へ参夫より歸廿二日一日大雨ふり廿三日京都立夫より三井寺へ参書仕度いたし色々見物有り夫より八ツ過に石山へ参彼近江八景面白事限なし夫より草津迄行藤屋三左衛門方宿廿四日に立参石邊え休夫より水口龜屋治右衛門方支度いたし夫より坂下龜屋とまる宿至而よし廿五日夫よりせきを越むく本という處に休夫より津参雨ふり七ツ過に爰宿とる廿六日六軒という處四つ過に支度いたし夫より松坂行妙照寺迄行爰にてまた支度いたし夫より伊勢ゆき白髪大夫え参り段〳〵馳走にてよく廿七日色々身を清め夫より四ツ時分に参詣

致神供なと備へ難有御拜いたし夫よりまた大坂へ歸り支度なといたし其まゝ外宮様へ参り其日直に串田宿紅葉屋九兵衛とまりやど至てよし明廿八日夫より山田と申處へ参書支度いたし夫より島ヶ原という處え参干鰯屋利右衛門と申者所に宿至て悪しゝ殊に此三日程足をいため各つかれまことに旅の難義平日の難有事思しられけり去なから何にもかもまかせつけ候得はうき中にも難有夫より朔日彌足いたみなからかさぎという處まて参支度なといたし夫より舟に乗り木津へ参夫より奈良え参りとうふや庄兵衛と申者處え参よく二日（續稿未見）

五

日に（虫喰）うはにして天理にしたか

う時は又

䷔(虫喰)

彌天利にしたがう時は吉也

何事も皆天道にまかせなば

ねてもさめても有かたきのみ

天保十年

亥正月元旦

奉伺所也

又若氣にもとること

䷕

二

六

誠に有がたし〳〵〳〵いよ〳〵本

の子供也

又十一日伺明暮向事

悅ひつけ有かたい〳〵とおもふ時

䷖

二也有難し〳〵〳〵

福田主重き病ひにふし給ふこと年

々にしてすてに三度まて身まから

んとし給ふ時つたなくも我天津神

國つかみを深く祈り奉りけれは不

思義に快よくなり給ふ有かたさの

餘りにかくはへりぬ

三度まていき歸りたる人はまた

からてんしくと我朝になし

と口すさみ悦びのこゝろやむときなきにまたことし秋の末より先のとしのことく打ふし給ひ日にましに重り給ひいたはしさ見るに忍びず

時に　天照太神と主の心と一つに成り給へは生とふしなりと申さとせは有かたしと請ひき給ふやいなやその病苦を忘れ給ひ夫より一日二日とひをふるまゝ快よく成り

給ふ有かたさにかくそ侍る

天てらす神の御心人こゝろ

ひとつになれはいきとふしなり

時に

文政十三年庚とら霜月下旬

藤原宗忠

おしむへし去年迄人のちようほう成こよみ春夏たちて秋風吹冬に成れは今少の人の用ひ最早今年はむかしことまた今年の若こよみとうつり遷りし年月もいとおしまるゝ

世のならい是ををもへは何ともに
只今日そ大事也ゆるし給ふな人々に
よまた來ぬけふの日の光り明日は
あれともけふの日のふたゝひ來ぬ
とおもへはたゝけふのおしむへし
其何時までもかはらぬは月と日の
御姿我身の上を思へは竹馬に乘し
其昔誠に昨日かおとつひとたゝ夢
のやうにおもはるゝ是をゝもへは
音に聞うらしまとやら龍宮へいた
り給ふ三百歳の立行をも三日ほど

にとおもひしも尤なりし次第なり（本暦の中に）

指當ることのみおもへ人はたゝ
去年のこよみ役にたつまし（同　表紙に）

執行口の心をよめる

向ふことみな御影かとおもひなは
ねてもさめてもありかたひかな

藤原宗忠

時に天保九年戊戌閏四月廿八日九
ツ時前に詠

常に此歌の心に居申候時は易に
二又心持樣にて漸々と宜敷

に向也

有かたし〳〵〳〵

六 一大病のたすかりしおんわするゝ事
一家も命も助りし恩をまた忘るゝ事
一開闢已來始ての道をつふす事
一天照太神の御道を悪魔のためにつふす事
右之つみの次第
一心をみたし俄に命をおとす事
一たいせつなる家を二軒つふす事
何事も心のまゝに成物を
ふちとしりつゝふちに入なよ

何事も少時節を延給へ
たとへまよひも心次第に

天保十四年閏九月カ
閏九月

一朔日 下出石 常左衛門
一三日晩夕 富岡 權平
一同夕 長船磯野上 嘉平治
一六日晩夕明朝 香々登 富左衛門
一七日夕 牛窓 三平
一九日晩夕 大ケ嶋 亦治郎
一同夕 西大寺 普門院
一十二日 宅
一二日晩 宅 七嶋屋五郎右衛門
一四日 橋原四郎右衛門 市兵衛
一五日朝 福田 萬介
一七日晩夕 伊部 長森
一八日晩夕 金岡 本蓮寺
一十日 天神坊
一十一日晩夕 倉田 傳太郎
一十三日 郷司

一十四日　村瀬氏
一十六日　今村（赤坂）
一十八日　河本
一廿日　むさ
一廿二日　宅
一廿四日　富岡
一廿六日
一廿八日　古田氏
十月（天保十四年十月カ）
一朔日
二三日　大たら
一十五日　宅
一十七日　岡（破損）
一十九日　同　西中（破損）
一廿一日　（破損）川
一廿三日　石尾
一廿五日　同
一廿七日　鉄屋
一廿九日
二二日　宅　晩
一四日　同

一五日
一七日　七嶋屋
一九日朝　江戸勘夕三番
一十一日　庭瀬
一十三日
一十六日　今村晩夕
一十八日　尺所
一廿日　同
一廿二日　石尾
一廿四日　紙工
一廿六日　歸

一六日
一八日朝　金岡夕西大寺
一十日朝　龜次晩夕倉田
一十二日　宅
一十五日　宅
一十七日　岡氏
一十九日　同
一廿一日　石黒下屋敷（宅）
一廿三日　佐分利
一廿五日　下加茂
一廿七日　宅晩夕鉄屋

一廿八日　古田
一晦日
九　覺
正月
一十三日晝土倉公夕石尾氏
一十五日　宅一万度
一十七日　宅
一十九日
一廿一日晝天城屋敷夕小西屋
一廿三日晝　土倉
一廿五日

一廿九日　（破損）寺
一十四日　同石田氏同六左衛門
一十六日　伊賀殿
一十八日
一廿日夕宵　一宮ふけ宅
一廿二日　宅
一廿四日
一廿七日　宅夕

一廿八日　宇野氏
（破損）日　今在家
二月
一朔日　同
一三日　尺所
一五日　吉原
一七日　宅
一九日
一十一日　庭瀬
一〇　二月會日覺
一十二日　宅晩

一廿九日　奥村
一二日　郷司
一四日　同
一六日　天城屋敷
一八日
一十日夕　一宮
一十三日夕　郷司日待

一十四日　村瀬日待
一十六日　今村宮晩夕
一同　夕　岡日待
一十九日　西中村
一廿一日　石黒
一廿三日　古田
一廿五日　早島
一廿七日　宅夕　鉄屋石尾
覺

二

三　月

一廿五日　豊女百日祭
一廿六日　豊女百日祭
一廿八日

一廿七日　宅夕　鉄屋
一廿九日　淨覺寺にて

四　月　日　割

一朔日　今村宮にて朝飯後より一日
一二日　宅　晩
一四日　神主祭り
一六日　池田伊賀殿晩夕　七島屋
一七日　宅　晩　一八日
一九日　新田沖田にて晝過より　一十日
一十一日　撫川應德寺庭瀬松林寺にて
一十二日　宅　一十三日

一十五日　宅伊勢講日待
一十七日　宅
一十八日　河本
一十九日　むさ
一廿二日　宅
一廿四日　早島
一廿六日　早島
一廿八日

一十四日　村瀬にて
一十六日
一十八日
一廿　日
一廿二日　宅
一廿四日
一廿六日
一廿八日

二　四　月

一三　日　郷　司
一五　日

一四　日
一六　日夕　七嶋屋

一十五日　一万度執行日待
一十七日　宅　晩夕　岡多兵衛
一十九日
一廿一日　石黒氏預屋敷にて
一廿三日
一廿五日
一廿七日　鉄　屋
一廿九日

一八日　石　田
一十日
一十二日　宅
一六月二日　岡　氏
一五月廿六日　古　田

一七日　宅
一九日
一十一日　庭　瀬
一五月廿八日　郷　司　氏
一六月十八日　郷　司　氏
一六月廿二日　田　口　氏

一四　六　月

一三　日　晝八ツ比　隅御屋敷
夕　一森うし
一十一日　晝　隅御屋敷
夕　高木御氏

一六　日　晝八ツ比　隅御屋敷
夕　佐藤常右衛門
一十三日夕　石　尾　氏
一十四日夕　備中屋六左衛門

一十六日　晝　隅御屋敷
夕　宇野氏
一廿　日　隅御屋敷
一廿三日　夕　丸龜町　野田屋町
福岡屋

七　月

一　三　日　晝　隅御屋敷
夕　一森うし
一十三日　夕　石尾氏
一十四日　夕　備中屋六左衛門
一十八日　夕　藤野町

一十八日　晝　服部御氏
夕　藤野町
一廿一日　晝　天城御屋敷
一五　日　夕　平野町
一六　日　夕　佐藤常右衛門
一十九日　延
一十六日　番　町
一廿一日　晝八ツ比　天城御屋敷

一廿三日　夕　丸龜町

七　月　末

覺

一廿七日
一廿九日

有と見てなきこそ元の姿なれ
無を養ふ身

八　月

一朔　日　朝中務様　晩伊賀様
〃郷司
一三　日　赤　坂
一五　日　同
一二　日　宅
一四　日　同
一六　日　同

一廿八日　中務様
一晦　日　中務少輔様

一七日　同
一九日
一十一日
一十三日
一十五日
一十七日
一十九日
一廿一日
一廿三日
一廿五日
一廿七日

一八日　同
一十日
一十二日
一十四日
一十六日
一十八日
一廿日
一廿二日
一廿四日
一廿六日
一廿八日

一廿九日

一六　十月

一朔日
一三日　大たら
一五日　西大寺
一七日夕　富田町用場宅
一九日夕　三番藤原
一十一日夕　庭瀬
一十三日　畫齋藤徳右衛門夕郷司
一十五日　宅
一十七日　宅夕岡

一晦日

一二日　宅
一四日　同
一六日夕　七島
一八日　河本金岡
一十日朝　佐々木晩夕倉田
一十二日　宅
一十四日　村瀬
一十六日　今村
一十八日　尺所

一十九日　同
一廿一日　石黒預屋敷
一廿三日　金　川
一廿五日　下加茂
一廿七日　宅夕鉄屋
一廿九日　浄福寺

一七

一十五日
一十七日　宅
一十九日　同
一廿一日　出羽様夕小西屋
一廿三日　一　森

一廿日　歸　宅
一廿二日　宅夕石尾
一廿四日　紙　工
一廿六日　郷司宅
一廿八日　古　田

一十六日　御隠宅夕
一十八日　幸　崎
一廿日　同
一廿二日　宅
一廿四日

一廿五日
一廿七日　宅
一廿九日

一八

會日次第

一十一日　庭　瀬
一十四日　朝飯後　御隅屋敷
一十五日　八ツ前より
一十七日　宅
一十九日　朝　日古木
一廿日　無　佐
一廿二日　岡　宅

一廿六日　鉄　屋
一廿八日　上　邊

一十三日　晩夕　村　瀬
一同十四日　晝　淺野にて
一十六日　朝飯後石黒預屋敷にて夕　今村氏
一十八日　赤坂河本
一同　夕　西中村
一廿一日　郷司岡氏
一廿三日　石　尾

一廿六日 晩夕 鄉　司

一九 一十一日 倉　田

一十三日 宅

一十五日 宅

一十七日

一十九日

一廿一日

一廿三日

一廿五日

一廿七日 宅夕 鉄屋

二〇 日々 覺

一十二日 撫川庭瀬

一十四日 鄉　司

一十六日 （以下破損）

一十八日

一廿　日

一廿二日

一廿四日

一廿六日

一十六日 御隱宅

一十八日

一廿　日

一廿二日 宅

一廿四日 大ヶ島

一廿六日 左　山

一廿八日

二一 一廿三日 書 天城屋敷

尾關丈五郎

二二 會日次第

一十六日 朝飯後 石黒御預屋敷

一同 夕

一十七日 宅

一十九日

一廿一日 天城屋敷小西屋

一廿三日 石　尾

一廿五日 下　山　田

一廿七日

一廿九日

一同 夜 奥村圓左衛門

一十七日　今村宅
一廿一日晩　鄉司茂左衛門　一同　夕　中仙道
一廿二日　岡多兵衛　一同　夕晩　宅
一廿三日朝　志賀氏　一同　夕
一廿七日晩　宅　一同　夕　石尾喜六郎
一廿八日同晩　淺野氏　一同　夕　鉄屋
一同日夕　御家中廻會　夕　大供高須龜次郎　中龜次郎　一同　夕よる　古田氏
一四日　十四日　廿四日　夕
一八日　十八日　廿八日　夕
一廿日　平野町　鉄屋　夕
一廿一日　茶屋町　大黒屋　夕　上中野村　榮三郎

二三

二四

一廿七日　十七日　七日
山本屋彌三右衛門にて支度
○八拾八文　二人共
夫より姫路の東のはなに留り宿屋すい谷屋
○百六拾文　二人
右同斷

十九日

天氣はれ六つ過に立大日と申處へ休み茶なとたへ
○四文　置候
此茶屋に
廣嶺宮託宣有其文のたまはく

なへての人心直く正しく其身には鬼神も是をかたむけす水火をかしるす金石も是か爲に隨ひとき（虫喰）も切るる事なしおもふへしもろ人よ直き心のみさほを（虫喰）れ廣嶺社文庫と有り（虫喰）まゝに爰に印す（虫喰）東の（中斷）廣嶺社文庫

夫よりかこ川東のはなにて支度いたし候いかなこのさいにてたへ少やすみ出夫より長池迄參り茶屋へこしをかけ三角壹つづさ共〇十二文置夫より大久保まて參り好茶屋へはいり一せん飯一せんつさ共竹のこくはひやきとうふのにしめにてたへ壹人前〇廿八文つゝつさとも二人前也夫より大倉谷宿屋あさ五申候もの所へ留り候はたこ代〇丁百六十四文同つさとも又〇十四文もち〆四百二十八文

廿一日

けふは大雨にて殊に吹ふりにて誠に向風に而大困り候へ共足宜敷ぬゝ〳〵兵庫西のはなへ少休み菓なと少たへ夫よりこうべと申所へ通彼楠公の折節五百年忌開帳有之立なから參詣仕寶物拜見も土足ゆへ不叶我こさきの物迄むかしを思ひ落涙に及夫よりこうへ町にて辨當遣ひふりの肴大切をやき是迄の高味にて代〇三十二文同つさとも外〇八文にしめ是も宜敷時四つ過也雨は中〳〵やみ不申誠に向ふ雨殊に吹ふり也夫より住吉へ候所雨次第に晴れ住吉にて茶屋へよりすしなとたへ〇三十文二人夫より西宮迄參り時は八つけふははや是迄十里也〇廿六文同つさ共夫よりあまケ崎へ參り支度仕〇四十貳文つゝ同づ

さともあまケ崎より舟に乗り舟ちん〇六十四文つゝ同つさと
も夫よりよとや橋へ參り宿屋備治へより候所暮五つ也同人所
宿つみ斷申候夫より又八軒屋迄參り候得は舟あり候とて參り
候所つさ承顏にて先へ行候處何ほと參り候ても八けんへ參る
事不相成道にて人に尋候へはどうとんぼりのそは也と申大に
あきれ日本橋東つめに留り旅籠代〇貳百二十四文つゝ夫より
晝舟にのり代錢百四十四文也同つさとも外〇拾四文つゝ二つ
わらす〆壹貫百十一文

廿　一　日

朝四つ時より日本橋より舟に乗り晩七つ過に橋本へつく舟賃
〇百四拾四文外に
〇廿四文かこせんつゝ
〇廿四文酒もち二人にて夫より橋本にて
〇四拾文　つさ
〇參拾四文よ　夫より八幡參り
〇百十三文　御守まき錢共　夫よりやはた下宿へ留り
〇貳百文つゝ　旅籠
〆九百四拾七文

廿　二　日

八幡を出竹田迄參り少休
〇拾五文　もち　外茶代
夫より下とはへ參

○六拾三文つゝ二人支度いたし候
夫より吉田へ參り田口へ晩八つ前也
○六十四文　かみゆひ代
凡是迄三貫五百十文ほど

廿　三　日

御本所御禮金壹朱肴料壹兩也　又
○凡廿文　賽錢
○三拾文　さうり代
一三夕壹分　宿へ
夫より七つ半を過候頃吉田を立大津迄參り屋と　是迄三リ
丸屋金六郎　誠に大家也

一貳百廿四文つゝ　旅籠代

廿　四　日

夫よりせたにて休夫より草津にて
一廿文　うはかもち
一拾四文　梅木辨當
一貳文　石部茶代
夫より夏見
一四文　茶代　かゝはにて休
一廿貳文　水口
一三十貳文　同

一三十四文　吟
一貳文　小子
一百六十四文　土山
一同斷
宿屋辰巳屋孫四郎
今日之道凡十五りも御座候有かたし〳〵

廿五日

今日は雨ふり難義のやう御座候得共却而御影とそんし奉り候
足のため甚よし夫より鈴鹿山にて休茶なとたへ
一貳文　茶代
彌雨ふり誠高山にて段々と山を登夫より市の瀬と申所へ參り
休みかの狩野の筆捨山へすく北前の山也しかし東の方近來山
やけ却而面白けしき也夫より楠原にて支度いたし
一代八文　にしめ
一拾貳文　わらす

道々御祓

十八日　千　度
十九日　千　度
廿　日　千　度
廿一日　千　度
廿四日　貳千度
廿五日　千　度

廿八日　弐千度
廿九日　千五百度
朔日　千五度
二日　四百度
三日　千六百度
けふも晝より上はれに相成しかし今日少足をいたみ夜にて又
支度いたし
一八文　めかけ
一拾弐文　津
夫より拾四丁も參り野口屋平兵衛申宿屋留り
一弐百文つゝ

廿六日
一拾弐文　六軒
一拾文　松坂
一八文　ひ人
一五拾五もん　もち　櫛田
一拾もん　齋宮村休
一百五十文　馬
一壹朱　外宮
一右同斷　同

廿七日

今日者上天氣にて參宮仕

廿　八　日

明星を出梛田へ參り爰にて燒もちなん錢
六軒へ參り爰にて辨當を遣ひ
〇三十文　置夫より小川へ參り
一拾貳文　遣ひ
夫より同八太にて茶つけたへ夫より
一三十六文
夫より大の木油屋新七休み
一二文　茶代
此間誠に大成原有り中にも三日の原と申て廣事たとへんかた

なし
一拾貳文　二本木德田屋平兵衛
夫よりかひと申處へ宿をとり旅籠屋
百七拾貳文也

廿　九　日

かひと出阿保と申所田原屋儀左衛門にて辨當を遣ひ候
一廿七文
夫よりなばり小竹屋彦兵衛
一五十文
一五文　三本松みきや
一百六十四文　山邊まつ屋又兵衛